[序章　生成ＡＩの概要と本書の目的](#_Toc142301009)

[はじめに](#_Toc142301010)

[生成ＡＩの定義や基本的な概要の説明](#_Toc142301011)

[私が陥った生成ＡＩの悩み](#_Toc142301012)

[本書の目的と読者へのメッセージの明示](#_Toc142301013)

[第一章　生成ＡＩによる価値観の変化](#_Toc142301014)

[本章で説明すること](#_Toc142301015)

[４つの変化](#_Toc142301016)

[**コミュニケーションの変化　―困り事を聞かずとも、解決できる？―**](#_Toc142301017)

[**コンテンツ消費の変化　―全員がプロデューサーになる？―**](#_Toc142301018)

[**ものづくりの変化　―同じようなものはいくらでも量産できる？―**](#_Toc142301019)

[**人々の心理の変化　―どんなことでも始められる？―**](#_Toc142301020)

[４つの変化に伴う我々への影響](#_Toc142301021)

[**コミュニケーションの変化が与える影響**](#_Toc142301022)

[**―人間は早く答えを欲しがるようになる？―**](#_Toc142301023)

[**コンテンツ消費の変化が与える影響**](#_Toc142301024)

[**―編集しやすい自由度の高いコンテンツを求める？―**](#_Toc142301025)

[**ものづくりの変化が与える影響**](#_Toc142301026)

[**―全ての人が発明に関わる？―**](#_Toc142301027)

[**人々の心理の変化が与える影響**](#_Toc142301028)

[**―とりあえずやってみる活動が激増する？―**](#_Toc142301029)

[第二章　生成ＡＩによる仕事の変化](#_Toc142301030)

[本章で説明すること](#_Toc142301031)

[５つの観点での仕事の変化](#_Toc142301032)

[**１　既存業務の変化　―機械が人間に合わせるようになる―**](#_Toc142301033)

[**２　新たな業務の発生　―新たなデータの取り方を考える―**](#_Toc142301034)

[**３　業務範囲の変化　―１人が担う範囲が急拡大する―**](#_Toc142301035)

[**４　業務のやり方の変化　―完成する前に見せるのが当たり前―**](#_Toc142301036)

[**５　サービスの変化　―究極のパーソナライズ化が起こる―**](#_Toc142301037)

[人間と生成ＡＩの役割](#_Toc142301038)

[第三章　生成ＡＩによる人材の変化](#_Toc142301039)

[本章で説明すること](#_Toc142301040)

[スキル・スタンス・行動の変化](#_Toc142301041)

[**スキルの変化　―これからの時代で求められることは分解力―**](#_Toc142301042)

[**スタンスの変化　―自分の想いをのせた目的と意思を持つこと―**](#_Toc142301043)

[**行動の変化　―効率化を図るだけではなく、価値を掛け算で増やす**](#_Toc142301044)

[教育やキャリアにおける生成ＡＩの影響](#_Toc142301045)

[**相対的に価値が下がること　―「詳しい」は意味をなさなくなる―**](#_Toc142301046)

[**相対的に価値が上がること　―「何か違う」という観の重要性が増す―**](#_Toc142301047)

[**教育やキャリアで重要なこと　―自分で意思決定をする経験を増やす―**](#_Toc142301048)

[第四章　生成ＡＩによる企業の変化](#_Toc142301049)

[本章で説明すること](#_Toc142301050)

[企業戦略の変化](#_Toc142301051)

[**経営戦略の変化　―究極のパーソナライズ化を目指す―**](#_Toc142301052)

[**事業戦略（既存）の変化　―今ない情報をデータ化して、顧客体験を向上―**](#_Toc142301053)

[**事業戦略（新規）の変化　―全てのユーザーが参加可能なビジネス―**](#_Toc142301054)

[ＨＲ戦略の変化](#_Toc142301055)

[**採用活動の変化　―生成ＡＩの活用に素養のある人を採用―**](#_Toc142301056)

[**育成の変化　―パーソナライズ化された育成プログラム―**](#_Toc142301057)

[**人材配置の変化　―顧客接点と商品の橋渡しになる生成ＡＩ―**](#_Toc142301058)

[最終章　生成ＡＩの未来と考えるべきこと](#_Toc142301059)

[本章で説明すること](#_Toc142301060)

[生成ＡＩの今後の流れ](#_Toc142301061)

[**法整備　―私たちの価値観や目的に基づいて形成される―**](#_Toc142301062)

[**活用難易度　―誰もがもっと簡単に生成ＡＩにアクセスできる―**](#_Toc142301063)

[**アイデンティティ　―私は何を目指しているのかが自己表現の核―**](#_Toc142301064)

[今日から学ぶべきこと](#_Toc142301065)

[**生成ＡＩをどう学ぶか　―プロンプトより原理や性質を見よ―**](#_Toc142301066)

[**日常的に何を意識するか　―何が変わるかの仮説を無限に持つ―**](#_Toc142301067)

# **序章　生成ＡＩの概要と本書の目的**

## **はじめに**

ＡＩの世界はもの凄い速さで進んでいます。新しいものが出てくるたびに、「どうやって使うの？とか」、「これが出たら自分の仕事がなくなるのじゃないか？」と、心配になるかもしれません。そんな風に焦ってしまう気持ち、非常によく分かります。

でも、ちょっと一息ついてみましょう。実際には、これだけ色々な機能が出てきても、全てを使う必要もなければ、すぐに全てを理解する必要もありません。大事なのは、ＡＩが何をしてくれるのか、それが自分の生活や仕事にどう影響するのかを理解することです。

この本では、「生成ＡＩによって結局何がどう変わるの？」っていう疑問に答えていきたいと思います。たくさんの新しい機能やサービスに目がくらんでしまわないように、全体像を見ることに重点を置いています。

生成ＡＩの未来予想や、どんな仕事がなくなるのか、という話はたくさんありますが、「自分たちの考え方や価値観がどう変わるのか」という観点から考える本は無かった為、私はこの本を書くことにしました。

ここに書かれていることが全部正しいとは限りません。でも、「生成ＡＩ、なんだっけ？」って思っているあなたに、何か新しい考え方を提供できれば嬉しいです。

ちなみに、私はエンジニアでも理系でもない、普通のサラリーマンです。その為、技術的な用語等は一切使わずに、誰にでも分かりやすく説明をしていければと思います。

一緒に新しいＡＩの世界を探求していきましょう。

## ­**生成ＡＩの定義や基本的な概要の説明**

ＡＩ（人工知能）は、もはや遠い未来のテクノロジーではなく、私たちの日常生活の中に深く浸透してきています。特に、「生成ＡＩ（Ｇｅｎｅｒａｔｉｖｅ　ＡＩ）」が注目を浴びています。今回は、この生成ＡＩに焦点を当て、その可能性と影響について探ります。

「生成ＡＩ」は、その名の通り何かを「生成」するＡＩです。生成というと何か新しいものを作り出すイメージを持つかもしれませんが、ここでの生成とは、情報や知識を元に、私たちが理解できる形で新たな「出力」を生み出すことを指します。

昨年から特に注目されている生成ＡＩの一つが「言語生成ＡＩ」です。このＡＩは、人間と同じように文を作り出し、それがあたかも人間が書いたかのような文章を生成する能力を持っています。例えば、電子メールのドラフトを作成したり、ニュース記事を作成したり、さらには小説や詩を書いたりすることも可能です。

言語生成ＡＩは、人間が与える「プロンプト（指示やヒント）」を元に文章を生成します。「夏の特徴を説明して」というプロンプトを与えれば、生成ＡＩは「夏は暑さや長い日照時間が特徴です。多くの人々が海やプールに行く時期でもあります。」といった文章を生成することが可能です。

しかし、皆さんも体験されたかもしれませんが、プロンプトの与え方によっては、思った通りの結果が出ないこともしばしばあります。これは、生成ＡＩがあくまで「与えられた情報を元に出力を生成する」能力を持っているためです。人間と違い、ＡＩは自身の意見や感情、経験を持っていないのです。

この本では、そんな生成ＡＩによって私たちはどのように変化するのかという仮説や考察を提供します。そして、特に私たちの価値観、仕事、人材、企業等の在り方にどのような影響を与えるのか、具体的に探っていきます。

私たちが生成ＡＩと共存する未来を模索するために、ぜひ本書をご一緒に読み進めていただければ幸いです。

## **私が陥った生成ＡＩの悩み**

自分自身も初めて生成ＡＩと出会った時、その可能性に圧倒されました。それはまるで未来のテクノロジーが今ここにあるかのような感覚で、すぐにでもその力を借りて何かを成し遂げたいと思いました。その一方で、その使い方や仕組みが一見して理解できるものではなかったのも事実です。

私が最初に手を出したのは、プロンプトの勉強でした。インターネット上の記事やブログ、教材などを見て、プロンプトの基本的な書き方や注意点などを学びました。しかし、それでも、生成ＡＩを使って何か具体的なことを成し遂げるという経験は、なかなかありませんでした。たまにメールのドラフト作成を試してみたり、一部の文書のチェックに使ったりはしました。

ただ、それ以上のことは色々試してみたのですが、無理やり使っていると言っても過言ではないくらいのものでした。また、生成ＡＩの技術が日々進化していることから、今覚えたプロンプトの書き方が、すぐに陳腐化するのではないかという不安もありました。そのため、どれだけプロンプトの勉強をしても、それがすぐに使えないことに焦りと不安を感じていました。

そんな中で思い至ったのは、「生成ＡＩを使って何ができるか」ではなく、「生成ＡＩによって何が変わるか」を考えることの重要性でした。生成ＡＩの最大の特徴は、私たちが今まで手がけてきた仕事やタスクを自動化・最適化することにあるのではなく、既存の枠組みを超えて新たな価値を創造する可能性にあると感じたのです。

この本を通じて、「生成ＡＩによって何が変わるか」という観点を、価値観・仕事・人材・企業の観点から深堀りをしていきます。

## **本書の目的と読者へのメッセージの明示**

本書の中心的テーマは、「生成ＡＩによってどんな変化が起きるのか？」という視点です。私たちはテクノロジーの進歩をただ追いかけるのではなく、その変化が私たちの生活や仕事にどう影響するかを考えることが重要だと考えています。

本書は、合計５章で構成されていますが、それぞれの章のみで読んでも、ある程度理解ができるようになっています。また、各章の最後に、まとめを記載しています。

時間が無いという方は、目次から気になるテーマだけ拾っていただいて、その章だけ細かく見ていただくことも可能です。

なお、あなたがこの本から得ることは、「生成ＡＩの技術的な操作方法」ではありません。あくまでこの本では「生成ＡＩによって何が変わるか？」を考察します。

従って、具体的なプロンプトの書き方やそのフォーマットの詳細についてはここでは取り扱いません。そういった技術的な側面については、私のｎｏｔｅや他の専門書籍、オンラインリソースをご覧いただくことをおすすめします。

この本を読んで、あなたが得るものは新たな視点、そして生成ＡＩがもたらす変化についての仮説です。これを武器に、あなたの仕事やプライベートがどう変わるか、どう変えるべきかを考える一助にしていただければ幸いです。そして、あなた自身の思考やアイデアを周囲と共有し、ディスカッションを深めるキッカケになればなおよいです。

最後に一つ、あなたがもし生成ＡＩについて学んでいる友人や同僚がいたら、一つ伝えていただきたいことがあります。「プロンプトの書き方を学ぶのも大事だけど、もっと大事なのは、生成ＡＩによって何が変わるかを考えることだよ」と。この一言が、彼らの学びに新たな視点を加えるきっかけになればと思います。

# **第一章　生成ＡＩによる価値観の変化**

## **本章で説明すること**

まず、この章で解説する仮説は、「生成ＡＩによる価値観の変化」です。この価値観の変化を以下４つの観点で考察しています。

* コミュニケーションの変化
* コンテンツの変化
* モノづくりの変化
* 人々の心理の変化

生成ＡＩが我々の生活、考え方、さらには価値観にもどう影響を与えるかという仮説を一緒に考えてみましょう。「え、そうなの？」と思うかもしれませんが、その驚きが新しい視点をもたらします。そして、それはあなた自身の見方を広げるキッカケになることでしょう。

この章を通じて生成ＡＩが未来にどんな可能性を生むか、そしてそれがどのような影響をもたらすかを考えることで、あなた自身の未来にワクワクするイメージを持ってもらえたらと思います。

## **４つの変化**

### **コミュニケーションの変化　―困り事を聞かずとも、解決できる？―**

まず１つ目の変化、「コミュニケーションの変化」からみていきましょう。結論から言うと、ここでは「コミュニケーションが課題ベースから、解決策ベースに変化する」と定義しています。深く掘り下げていきましょう。

まず、これまでのコミュニケーションの在り方を確認しておきましょう。人間が他者とコミュニケーションをとるとき、特にビジネスの場では、相手の課題を理解し、それに対する解決策を提供するというアプローチが一般的でした。これは言うなれば、課題ベースのコミュニケーションと呼ぶことができます。（要するに「困っていることを掘り下げていって、解決してあげる」という意味です。）

考えてみてください。あなたが自分のプロジェクトチームのリーダーだと仮定しましょう。そして、メンバーから「この作業、手間が多すぎて時間がかかるんです」という課題が表出しました。そこであなたは問題の深層を探るため、「どの部分が手間なのか？」、「何が時間を取られているのか？」といった具体的な問いを投げかけ、情報を収集します。その後で初めて、その課題に対する具体的な解決策を考え、提供します。こうしたプロセスが、課題ベースのコミュニケーションの一例です。

しかし、生成ＡＩの出現により、これまでの常識が覆されようとしています。生成ＡＩは、人間の代わりに瞬時に数多くの解決策を生み出すことが可能です。それも、ただ問題を解決するだけではなく、その解決策をビジュアル化することも可能なのです。

例えば、「この作業、手間が多すぎて時間がかかるんです」という課題が表出した際に、「その手間を取り除く解決策は１〜１０まであるけど、どれが解決したいイメージに近い？」と一瞬で返すことができます。

また例えば、あなたが「会議が長すぎて疲れる」とぼやいたとしましょう。ここでは具体的な解決策を求めているわけではありません。ただただ、あなたのストレスを吐露しただけ。しかしこの一言から、生成ＡＩは様々な解決策を生成します。それは「会議の時間を短縮するための効率的な進行方法」であったり、「疲れを感じにくい環境を作るためのアイディア」であったりします。更には、「会議中に疲れを和らげるためのストレッチ方法」を提案することも可能です。

この生成ＡＩの能力は、新規事業開発や営業の場でも有効に利用できます。従来なら、顧客の課題を深く探り、理解した上で解決策を提案するというアプローチが主流でした。しかし、生成ＡＩの存在により、まずは様々な解決策を提示し、その中から最適なものを顧客自身に選んでもらうという形になります。言うなれば「解決策ベースのコミュニケーション」と呼ぶことができます。（要するに「困っていることを掘り下げなくても、解決できる」という意味です。）

イメージしづらいと思うので、もう少し具体的にみていきましょう。

例えば、コールセンターを考えてみましょう。顧客が困りごとを伝えた時、コールセンターのオペレーターはその課題を深く理解し、適切な解決策を提案することが求められます。しかし、生成ＡＩが導入されることで、オペレーターはさまざまな解決策を即座に提示することが可能になります。顧客はその中から自分に適したものを選び、即座に解決に向かうことができます。

また、新規事業開発の場でも、生成ＡＩの力を借りることで、従来のアプローチが大きく変わります。新規事業開発においては、潜在的な顧客のニーズをくみ取り、それに対する最適なサービスや製品を提供することが重要となります。しかし、生成ＡＩを用いれば、まずは様々な解決策を生み出し、それを元に顧客のニーズを具体化することができます。

不動産の仲介業者も同様です。顧客が「広いリビングがほしい」とぼやくだけでも、生成ＡＩはそのニーズから様々な物件を提示することができます。顧客はその中から自分の理想に近い物件を選び、納得感を持って契約に進むことができるでしょう。

このように、生成ＡＩの導入は、私たちのコミュニケーションを根本的に変え、私たちの日常生活に新たな価値をもたらすことでしょう。それは、我々が直面する課題に対するアプローチを大きく変えるだけでなく、私たちの生活そのものを豊かにする可能性を秘めています。

まず一つ目のコミュニケーションの変化として、「コミュニケーションが課題ベースから、解決策ベースに変化する」ということを覚えていただければと思います。

### **コンテンツ消費の変化　―全員がプロデューサーになる？―**

２つ目の変化は「コンテンツ消費の変化」です。

これまでの私たちのエンターテイメント体験は、大半が受動的なものでした。テレビドラマを見る、映画を観る、小説を読む、音楽を聴く、そして漫画を楽しむ。これら全てが、創作者が提供する内容を私たちはただ受け入れる、という形式を取ってきました。

もちろんその中での進化もありました。テレビやラジオのリモコンを握りしめ、チャンネルを選んだり、好きな曲を再生したりするという程度の選択肢が私たちには与えられていました。インターネットの発展と普及に伴い、私たちは手軽に情報を共有し、感想をネットに投稿することが可能になりました。ＳＮＳやブログ、レビューサイトでは、私たちが経験したエンターテイメント体験についての意見が幅広く展開されています。

これらは個々人が自身の体験を共有し、他人と情報を交換するためのプラットフォームであり、視聴者、読者、リスナーといった消費者側からのフィードバックを可能にしています。

しかし、それはあくまで＂意見の共有＂であり、元のコンテンツ自体を変えるものではありません。我々は未だに、制作者が作ったものを受け入れる形でコンテンツを享受しているのです。

ここで、生成ＡＩが登場します。生成ＡＩはテキスト、画像、音楽、動画といった様々な形式のコンテンツを生成する能力を持っており、その内容はＡＩが学習したデータに基づいています。

言い換えれば、我々が指示した条件に基づいて新しいコンテンツを生成することが可能なのです。　この能力が意味することは何か。それは、私たちがこれまで受け入れるだけだったコンテンツを、自身の意志で変えて享受できる、新たなエンターテイメントの形が生まれるということです。

具体的にイメージすると分かりやすいでしょう。あるテレビドラマの結末に納得がいかないと感じた時、その結末を自分の思う方向に変えてしまうことができるのです。好きな小説のストーリー展開に物足りなさを感じた時、その展開を自分の望むように書き換えて読むこともできます。

考えてみれば、これは視聴者や読者が自身の想像や予想を具体的な形に変え、それを実際に消費することが可能になる、非常に革新的なエンターテイメントの形です。私たちは受動的な観客から一歩進み、コンテンツの一部を自分自身で創造し、それを楽しむ能動的なエンターテイメント体験者となるのです。

さらに、私たちが自由にコンテンツを変えることができれば、それは創作者に対するフィードバックの一つの形ともなり得ます。視聴者がどのような結末を望み、どのキャラクターに共感し、どの展開を求めるのか、その情報は創作者にとって非常に価値のあるものです。　このように、生成ＡＩの導入によってエンターテイメントの世界が変化する可能性は無限大です。それは私たちが物語や芸術をどのように受け取り、理解し、体験するかを変えるだけでなく、私たち自身の思考や視点を広げる可能性を持っています。

生成ＡＩの可能性が開く未来は、まだまだ未知数であり、その探求は私たち全てのエンターテイメント体験者にとって、新たな興奮と探究心をもたらすことでしょう。

### **ものづくりの変化　―同じようなものはいくらでも量産できる？―**

３つ目の変化は、「ものづくりの変化」です。これは一言でいうと、「再現性を担保することが非常に簡単になること」です。

このトピックは、我々のビジネスや学習、さらには日々の生活に対する視点を変える可能性があります。現在、生成ＡＩの進歩によって、これまで時間とエネルギーを費やしてきた「再現性」の確保が、驚くほど簡単になるという時代が到来しています。

従来、人間の業務や学習の一部は、成功した手法や結果の再現に向けた取り組みが重要な役割を果たしてきました。ビジネスの世界では、コンサルティングファームが開発したフレームワークやツールが一例です。

これらは、問題解決や意思決定のプロセスを構造化し、再現性と一貫性を担保することを目指しています。また、ここ数年でブームとなった統計学も、再現性を追求する一例です。確率的に同じような結果を出すための手法として、大きな影響力を持っています。

私たちがビジネスメディアを閲覧する理由の一つも、他社や他人の成功を学び、自身の仕事でその成功を再現するためです。私たちは、他者が採用した戦略やフレームワークを理解し、自分たちの文脈で適応することで、同じような価値を生み出すことを期待しています。

しかし、生成ＡＩの台頭により、この再現性の確保が非常に簡単になるという新たな風景が広がっています。たとえば、あるサービスに似たようなサービスを作るというリクエストや、あるフレームワークを活用して同じようなアイデアを１０個作るという作業は、ＡＩの助けを借りることで、これまで以上に迅速かつ効率的に行うことが可能になります。

これは、頭の良い人にお金を払ってタスクを遂行してもらっていたところから、ＡＩを活用して無限に瞬時にタスクを遂行するという、大きなパラダイムシフトを意味します。

さらに驚くべきことに、生成ＡＩは「これを再現するために重要な要素は何か」という部分を分解し、それを別の事柄の生成に活用することが可能です。これにより、生成ＡＩは単に既存の結果を複製するだけでなく、新しいアイデアやソリューションの生成にも寄与します。

これは、再現性と創造性が交錯する領域で、人間だけが行ってきた作業をＡＩが担うことにより、人間の創造的な能力をより高いレベルに引き上げる可能性を秘めています。

つまり、今まで多くの人は「１から１０」や「１０から１００」の段階に携わり、一部の天才や技術の進化に「０から１」の段階を委ねてきたのですが、私たちはもっとその「０から１」の段階に直接的に、そして可能性としては集団的に向き合うことが可能になるでしょう。その創造物は生成ＡＩを使用して生み出されるため、厳密には完全な「０から１」ではないかもしれません。しかし、この進化は、私たちが自分自身の能力を高め、創造的な思考を促進し、世界をより良く理解するための新たな道を開くことでしょう。

### **人々の心理の変化　―どんなことでも始められる？―**

最後の変化は「人々の心理の変化」についてです。

これまで、新しいことを始めるという行為は、高い精神的ストレスを伴うことが多かったです。もちろん、新たなチャレンジは時間や費用などの物質的なコストもかかりますが、それ以上に心理的な負荷が大きいことが一般的です。

例えば、新たにプログラミングを学ぼうとするときを想像してみてください。どのプログラミング言語から始めたら良いのか、どの教材を使うべきなのか、といった疑問から始まります。そして、他人の前で自分の未熟さをさらけ出すことへの不安もつきまといます。「自分ができないと思われたらどうしよう」という心理的な壁が、学びの道を遮ることがあります。さらに、オンラインスクールなどを利用する場合でも、些細な問題でつまずいたときに相談する相手がいないと感じてしまうことがあります。

これら全てのストレス源は、新しいことを学ぶという行為の本質的な難しさからくるものです。初めての挑戦は、必ずと言っていいほど失敗を伴います。そして、その失敗を他人に見られることを恐れて、挑戦そのものから遠ざかることがあります。この「他人にできないと思われたくない」という恐怖が働き、結果として学びそのものから手を引いてしまうのです。

しかし、生成ＡＩはこうした問題を解決する可能性があります。なぜなら、生成ＡＩは自分ができないことを正確に把握し、的確な指導を提供してくれるからです。例えば、プログラミングの学習について考えてみましょう。生成ＡＩに「Ｐｙｔｈｏｎを学びたい、どこから始めればいい？」と尋ねれば、初心者に適した学習プランを提案してくれるでしょう。

さらに、自分で書いたコードが間違っているところを「直して、今後どのように気をつければ良いかアドバイスして」と頼めば、即座に対応してくれます。

生成ＡＩを利用すれば、語学習得から料理、ガーデニングまで、あらゆる新しいことを自分のペースで、気軽に始めることが可能になるでしょう。生成ＡＩが提供するインタラクティブな学習環境は、学ぶことの難しさを軽減し、自分自身の成長を手助けします。生成ＡＩによって、新しいチャレンジを始めることがより気軽になり、またそれを続けることが容易になるのです。

## **４つの変化に伴う我々への影響**

ここまでは生成ＡＩが我々の生活に与える変化を探求しました。この章では、その変化が我々の生活や思考にどのように影響を及ぼすかについて考察します。大前提、さまざまな意見がある中で、私たちはここでは生成ＡＩを否定するのではなく、我々との共存の道を模索します。

### **コミュニケーションの変化が与える影響**

### **―人間は早く答えを欲しがるようになる？―**

先ほど紹介した通り、「コミュニケーションが課題ベースから、ソリューションベースに変わること」が日常に浸透すると、我々はさらに速く答えを求めるようになるでしょう。

これまでビジネスの場では、「先に結論を」とか「要するに結論は何？」というプレッシャーを感じることがよくありました。しかし、この新たなコミュニケーションスタイルは、その考え方を日常生活のあらゆる場面にも広げます。

例えば、友達同士で居酒屋を探すという状況を想像してみてください。これまでは「何が食べたい？」という質問から話が始まり、メニュー、価格、場所、雰囲気など様々な要素を考慮しながら選びます。

しかし、生成ＡＩの進化により、「男女〇人で１年ぶりに行くお店のおすすめは、これら５つの店舗です」という形で、我々の代わりに最適な選択肢が提示されるでしょう。それはある種、我々の選択肢を絞り込むサポートをしてくれることになります。

また、家電量販店の店員に何か質問をする際も似たような変化が見られます。「何にお困りですか？」から始まる対話が一変し、あらかじめ生成ＡＩが我々の状況やニーズを理解し、それに基づいて「その状況ならこの家電やあの家電が最適で、このキャンペーンを利用すれば最もお得です」といった具体的なアドバイスを提供するのです。

さらに他のシーンを考えてみましょう。たとえば、旅行の計画を立てるときです。これまでは目的地や宿泊先、観光スポット、レストランなど、すべてを自分で調べて決めていたとします。しかし、生成ＡＩが介入することで、「あなたの興味と旅行日数に基づいて、最適な旅程はこれです」という具体的なプランが提示され、我々はその中から選ぶだけで良くなるでしょう。

もう一つ、例えば教育の場でも影響が見られます。学生が複雑な問題に直面したとき、これまでは解答の手がかりを見つけるために数時間かけることもありました。しかし、生成ＡＩの介入により、「この問題を解くにはこういうステップを踏むとよいです」という具体的なヒントが提示され、問題解決に向かう道筋が明確になるでしょう。

これらの例からわかるように、生成ＡＩの進化により我々は速く答えを求め、その答えから自分たちのニーズを具体化するようになります。

これは決して悪いことではありません。むしろ、私たちの日常生活を効率的にし、時間とエネルギーを自分たちが真に価値あると感じる活動に集中できるようにするための一助になるのです。

しかし、我々が早く答えを求めるようになる一方で、生成ＡＩとの関係性については慎重に考える必要があります。自動化された解答がすべてを解決するわけではありません。時には人間の判断や直感、独自の視点が必要な場面もあります。そのため、生成ＡＩの提案はあくまで一つの選択肢であり、最終的な決定は我々自身が下すべきだということを忘れてはなりません。

### **コンテンツ消費の変化が与える影響**

### **―編集しやすい自由度の高いコンテンツを求める？―**

それでは次に、我々の「コンテンツを受動的ではなく能動的に享受するようになる」という変化に焦点を当て、この動向がどのように私たちの日常を変えていくのかを見てみましょう。

この変化は、「コンテンツの完成度や質だけではなく、自由度を求めるようになる」という我々の姿勢の変化を引き出すでしょう。

以前は、我々が接触する全てのコンテンツは既に誰かによって形作られ、それを我々が享受するという関係でした。一部の人々がそれを改変したり、アレンジしたりすることはありましたが、大多数の人々は受け取る側、消費する側でした。

しかし、これからはそうはいかなくなります。生成ＡＩの登場により、我々はもはや単なる消費者ではなく、生産者、あるいは改変者としての役割を果たすことが可能となります。それがもたらす変化の一つが、「自由度」の評価軸です。これは「どれだけ自分の好みに合わせてコンテンツを変えられるか」という新たな判断基準であり、これまでにない価値観を生み出すことでしょう。

例えば、ミステリー小説を考えてみましょう。従来は、作者が考え出したトリックや真犯人が誰なのかといった要素が最も重要でした。しかしこれからは、そのトリックが他のトリックと組み合わせられるか、あるいは犯人を自分で改変しやすいようになっているかといった、物語の「自由度」が重要になる可能性があります。

また、Ｙｏｕｔｕｂｅの動画企画も、結末や過程が視聴者によって自由に変化できる形になるかもしれません。これまでの動画はほとんどが一方的な消費が主でしたが、生成ＡＩの進化により、視聴者自身がコンテンツを生成・改変する役割を持つことが可能となります。

その結果、視聴者が自分の意志で結末を変えたり、過程を操作したりできる動画が増えることでしょう。更には、「ここでこの作業を生成ＡＩに任せると、こういった結果になる」といった、視聴者に向けたＡＩの活用ガイドを含んだ動画が増えるかもしれません。

音楽でも同様の変化が見られるでしょう。曲のメロディーやリズム、歌詞を自分好みに調整できる音楽が評価されるようになります。食事においても、生成ＡＩが自分の好みや冷蔵庫の中身に合わせたレシピを提供することが可能になります。

これら全ては、「どれだけ自分でいじれるか」「いじりやすいか」という新たな評価軸が登場することを示しています。

受動的な消費から能動的な改変へと向かう我々の行動は、コンテンツの評価基準を大きく変えるでしょう。そしてそれは、私たちの日常生活のあらゆる側面に影響を及ぼすこととなるのです。

### **ものづくりの変化が与える影響**

### **―全ての人が発明に関わる？―**

次に、ものづくりの変化として述べた「再現性を担保するのが簡単になる」という変化の波も、我々の行動や視点を大きく変えます。

一言でいうと、「全ての人が、発明をできるようになる」ということです。

我々の社会において、＂０→１＂、すなわち何もない状態から何か新しい価値やアイデアを生み出すという行為は、一部の人々、特にクリエイターや技術者に限られてきました。これはその活動が特殊な才能や深い技術知識を必要とするためです。

ただし、近年のＩＴ技術の進化は、一部の技術者が自分自身で新たな価値を生み出す可能性を開いてきました。

特にプログラミングスキルを持つ人々は、自身のアイデアや創造性を形にする手段を手に入れ、それによって彼ら自身が新たな価値を創造する主体となることが可能になりました。

しかし、生成ＡＩの登場とその普及は、これらのパラダイムを大きく塗り替えるでしょう。生成ＡＩの助けにより、創造的なスキルや知識を持たない一般の人々も、新しい価値を生み出すための手段を手に入れることが可能となります。

これは、我々一人一人が自身のアイデアや視点を形にする機会を得て、その価値を自身で１から１０へ、さらには１００へと拡張する可能性を手に入れることを意味します。

具体的には、ビジネス書のような複雑な内容を形にする事例を考えてみましょう。過去、出版という行為は一握りの人々、特に専門家や作家に限られており、彼らだけが自身のアイデアを形にし、それを他人と共有することが可能でした。

しかし、生成ＡＩの進化により、誰もが自身の思考を文章にすることが可能となり、一度形にしたその思考をさらに横に広げて別のテーマや視点で新たな価値を生み出すことが可能になります。（何を隠そう、実際に本書こそ、特別な専門家や作家が作った訳ではないビジネス書です。）

さらに、３Ｄプリンターのような最先端技術もこの変化の一例です。かつては、３Ｄプリンターを扱うためには専門的な知識や技術が必要で、その使用は一部の人々に限られていました。

しかし、生成ＡＩの助けを借りることで、一般の人々も自分自身で３Ｄモデルを設計し、それを物理的な形にすることが可能となるでしょう。

また、ＳＮＳもこの変化の波に乗っているでしょう。従来は自己表現の一形態として「私の日常」を共有するツールでしたが、これからは「私が作った何か」を発信するプラットフォームへと変化していくでしょう。

これらの変化が示しているのは、私たち一人一人が特定の人々に依存することなく、自分自身で新たな価値を創造し、その価値を拡大していくことが可能であるという新たな時代の到来です。

要素を分解し、それを再組織化して新たな価値を生み出す。これは、ある種の「発明」の活動と言えます。そしてその活動は、かつての専門家やクリエイターの手から、一般の人々の手に委ねられるようになるでしょう。

このパラダイムシフトは、社会全体の創造的能力を飛躍的に向上させ、新しい可能性を開くでしょう。なぜなら、我々一人一人が、自分の視点や経験を生かして、自分だけのオリジナルなコンテンツを作り出すことが可能になるからです。

また、その創造的なプロセスは、単にアイデアを形にするだけでなく、それをどのように拡大し、どのように広げていくかという視点も必要とします。そしてその視点を持つことで、一つのアイデアが様々な形を取り、さらには新たな価値や影響を生み出すことも可能となるでしょう。

最終的に、この新たな視点や能力が広く普及すれば、我々一人一人が、自分の手で新たな価値を生み出し、その価値を共有し、さらにはそれを広げていくという新たな社会を形成することが可能となるでしょう。これは、新たな創造的な時代の到来を示しています。

### **人々の心理の変化が与える影響**

### **―とりあえずやってみる活動が激増する？―**

最後に「新しいことにチャレンジする心理的ハードルが下がる」という変化が、どのような影響を与えるかを説明し、この章を締め括ります。

それはズバリ、「とりあえずやってみる活動が激増する」という現象です。

以前までの、新しいことに挑戦する際の一般的な工程を考えてみましょう。

例えば、「ビジネス本を書いてみたい！」という願望があったとしましょう。最初に多くの人が行うのは、インターネットで「ビジネス本の書き方」を検索し、そのプロセスや技術についての基本的な知識を獲得することです。

その後、実際に文章を書くためのスキルを身につけるため、専門書を購入したり、ライティングの講座に参加したりするでしょう。そして、徐々に自分で文章を書けるようになり、他人からフィードバックを受け取りながらスキルを磨いていきます。

しかしこの工程には、多くの挫折点が含まれています。「ビジネス本の書き方」を検索しただけで、「これは難しそうだ、時間がかかりそうだ」と感じ、挑戦を断念することもあるでしょう。専門書を買っても、読む時間がなくて放置してしまうこともあるでしょう。

また、ライティングの講座には高額な費用が必要な場合もあり、それが挑戦のハードルとなることもあるでしょう。

結局のところ、本当にビジネス本を書きたいという強い意志がなければ、挑戦を始める前に手が引けてしまうことが多いのです。

しかし、生成ＡＩの登場により、「とりあえずやってみる」活動が劇的に促進されることでしょう。

なぜなら、生成ＡＩはビジネス本の書き方のプロセスを明示し、それに従って支援することが可能だからです。まずは自分の思ったことを書いてみて、それを生成ＡＩに添削してもらうことができます。また、生成ＡＩに対してテーマを与えて、そのテーマに基づく書き出しを提案してもらうことも可能です。

このパターンはプログラミングやデザインなど、様々な領域に適用可能です。従来、多くの人々が「本当はこれをやってみたいのだけど」と躊躇していたことが、生成ＡＩの存在により驚くほど容易に始められるようになります。

つまり、生成ＡＩの普及によって、我々の生活に「とりあえずやってみる」という行動が著しく増えるのです。この変化は、我々の生活や社会全体に深い影響を及ぼすことでしょう。

**本章のまとめ**

* 生成ＡＩによって大きく４つの変化が起こる
  + コミュニケーションが課題ベースから、解決策ベースに変わる
  + コンテンツ消費が受動的ではなく、能動的になる
  + ものをつくる上で、再現性を担保することが簡単になる
  + 新しいチャレンジをする心理的ハードルが、大きく下がる
* これらの変化に伴って、我々のマインドにも大きな変化が生まれる
  + あらゆる場面で答えを早く求める
  + 編集しやすい自由度の高いコンテンツを求める
  + あらゆる人が０→１の発明に関わる
  + とりあえずやってみる活動が爆発的に増える

# **第二章　生成ＡＩによる仕事の変化**

## **本章で説明すること**

第一章では、私たちの生活に深く関与してきた新たなテクノロジーである生成ＡＩが、私たちの価値観や考え方、行動の仕方にどのような変化をもたらすのかについて触れてきました。生成ＡＩは、私たちの生活やコミュニケーションの方法、コンテンツの評価基準、さらには創造力の発揮方法までを塗り替える可能性を秘めています。

今まで、価値観や視点の変化について考えてきましたが、第二章では新たな側面から生成ＡＩの影響を探求していきたいと思います。

具体的には、「生成ＡＩによって私たちの仕事がどう変わるか」について詳しく考察していきます。多くの人々が「ＡＩは私たちの仕事を奪うのではないか？」という不安を抱えていますが、本書では異なる視点でアプローチしてみたいと思います。

ここで注意していただきたいのは、「特定の職業が無くなる」や「この新しい職業が必要になる」等の具体的な職業の未来予測をするのではなく、より一般的な視点から、どのような種類の業務や仕事がどう変化していくのかという観点で考察します。

生成ＡＩが進化することで、仕事の内容や業務の進め方、働き方そのものが大きく変わる可能性があります。

それは単に、生成ＡＩが私たちの仕事を代行するだけでなく、人間と生成ＡＩが互いに協働し、各々が得意とする領域で最大限に活躍するという新たな形の仕事のあり方を生み出すかもしれません。

では、そのような未来を具体的にどのように想像できるのでしょうか？私たちは何をすべきなのでしょうか？それを考察するために、第二章では生成ＡＩによる仕事の変化を５つの観点で説明した上で、生成ＡＩと人間の役割を考察していきたいと思います。

## **５つの観点での仕事の変化**

### **１　既存業務の変化　―機械が人間に合わせるようになる―**

現代社会におけるあらゆる業務は、一定の「フォーマット」を有するものが非常に多いです。その「フォーマット」は、基本的な形状や枠組みが決まっていて、具体的な内容が異なるものの、その構造やフレーム自体は固定されたものを指します。

ここには、効率化、規則性、そして一貫性を求める私たちの社会的な要求が反映されています。

私たちが日常的に目にする例としては、「求人広告」や「求人票」が挙げられます。これらは、募集要項や待遇、企業の紹介といった、一定の項目に沿った情報提供を行うことが求められています。

この求人票を作成するには、人事部門の担当者が各項目に合わせて情報を入力し、それを整形するという作業が伴います。

また、企業が新製品をリリースする際に発行する「プレスリリース」も、固定的なフォーマットに基づいています。新製品の詳細情報やリリース日、特長などを含め、メディアや一般の消費者に情報を効果的に伝えるための構造化された文書となっています。

これもまた、企業の担当者が情報を整理し、適切な場所に配置するという作業が必要です。

さらに、ビジネスシーンでは、「契約書」や「ビジネスメール」もまた一定のフォーマットが存在します。契約書は、法的な規定に従った特定の形式や条項を含むものであり、ビジネスメールは、プロフェッショナルなコミュニケーションを維持するためのエチケットや規範が求められます。これらすべてが、「フォーマット」という共通の要素を有しています。

ここで重要なのは、これら全てのフォーマット作成や情報入力という作業は、人間が行ってきたという点です。人間はこれらの様々なフォーマットに対して、自身の行動や思考を適応させてきました。

要するに、「人間が機械やフォーマットに合わせていた」のです。これは、業務の効率化や一貫性を確保するための必要な措置でしたが、一方でそれは私たちの時間や労力をも必要としていました。

しかし、この状況は生成ＡＩの台頭により、大きな転換点を迎えています。生成ＡＩは、ユーザーが自然な言語でのコミュニケーションを通じて、さまざまなフォーマットの文書を自動生成する能力を持っています。

具体的には、「うちはこういう企業で、こういう仕事がある」と生成ＡＩに対して話すだけで、求人票やプレスリリースなど、必要なフォーマットに従った文書が自動的に生成されます。

この進歩は、「機械が人間に合わせる」新たな段階を示しています。以前は人間がフォーマットに合わせてデータを入力し、情報を整理する必要がありましたが、生成ＡＩのおかげでそれらの作業が自動化または大幅に簡略化されます。

人間が行っていたフォーマットに基づく作業の大部分が、ＡＩに取って代わられることにより、我々の業務は大きく変革されるでしょう。

そして、この変革は決して小さなものではありません。それは、私たちの労働時間を大幅に減らし、精神的な負荷を軽減します。また、より専門的なタスクに時間とエネルギーを集中することを可能にします。

私たちは、単純な入力作業から解放され、創造性や戦略的な思考により多くの時間を費やせるようになります。このようなパラダイムシフトは、まさに私たちが従来行ってきた業務に対して、最も大きな影響を与える変化であると言えるでしょう。

### **２　新たな業務の発生　―新たなデータの取り方を考える―**

前述したように、生成ＡＩは私たちが日常的に行っている数々の「フォーマットに基づく」業務を自動化し、私たちがより創造的で、戦略的な思考に時間を割くことができるようになります。

一方で、ＡＩとの協働により新たに求められる業務も存在します。特に生成ＡＩがますます個別化・最適化されるにつれて、そのために必要なスキルやタスクが増えていくでしょう。そういった新たな業務の一部を具体的に探ってみましょう。

新たな仕事、そして新たな役割が求められる時代に、私たちはどのように対応すべきなのでしょうか。まずは、生成ＡＩと協働するために必要なステップを理解することから始めてみましょう。

生成ＡＩを活用するためには、ざっくりと分けて以下の４つのステップがあります。

1. データを取得する
2. データを生成ＡＩが学べるようにクレンジング（整える）
3. データを生成ＡＩに学ばせる
4. 生成ＡＩに適切に指示する

既に世の中にリリースされている生成ＡＩ（例えばＣｈａｔＧＰＴなど）は、③の学ばせるという工程までを、既にやってくれています。これらのＡＩは、ネット上の膨大なデータを使って訓練され、人間に代わってある程度の仕事をこなすことができます。

しかし、これからの時代は、万能型の生成ＡＩではなく、特定の分野や領域に特化した生成ＡＩが重要となってくると予測されています。

それは「法務」のような部署単位であったり、「神奈川県◯◯市」のような地域単位、あるいは「私」のような個人単位であったりするかもしれません。つまり、特定の情報だけを切り取り、深く学習させることで、それを更に人間にとって使いやすくすることが求められます。

このような特化型の生成ＡＩを開発するためには、①から②のステップが特に重要となります。具体的なデータの取得とクレンジングは、ＡＩが学べる形式で情報を整理するために不可欠なスキルです。

例えば、あなたが自分の思考の癖を学ばせ、あなたがどのように考えるかをすぐに生成するＡＩを作りたいとしましょう。そのためには、まずあなた自身の思考パターンをデータ化する必要があります。

しかし、思考の癖というものはなかなか直接的にデータ化することは難しく、どのようにデータ化すればよいかわからないことも多いでしょう。

そのためには、たとえば１０００以上の思考テストを行ったり、面接形式で経験を話したりすることでデータ化する方法があります。また、１ヶ月間の会話を全て記録してそれを使うという方法もあります。

このデータ取得方法とクレンジング（整える）方法を考える仕事は、今後あらゆる業界で求められていくでしょう。

そしてもう一つ、忘れてはならないステップが④、生成ＡＩに適切に指示をすることです。これはあくまで人間が行うべき役割であり、ＡＩが自分自身で決定することはありません。ここは新たに求められる仕事というよりも、全ての仕事に求められる要素と言えるかもしれません。

### **３　業務範囲の変化　―１人が担う範囲が急拡大する―**

続いては「業務範囲」の変化です。

長年にわたり、業務は細分化され、専門性を持った個々の人々に役割が割り振られてきました。

ＩＴプロダクト開発ではフロントエンドエンジニア、ＵＩ・ＵＸデザイナー、バックエンドエンジニア、インフラエンジニアなど、細かく役割が分けられ、それらをプロダクトマネージャーが束ねてきました。

また、広告制作ではコピーライター、アートディレクター、グラフィックデザイナー、調査担当などがおり、それらをプロデューサーがまとめてきました。

さらに、医療の現場でも、一般的な医師、専門医、看護師、薬剤師など、患者の治療に必要な専門家が個々の役割を果たし、それを診療部長が統括しています。各役割は高度な知識と技術を必要とし、それぞれがプロフェッショナルとしてのスキルを磨いてきたのです。

しかし、生成ＡＩの出現により、この風景が変わりつつあります。生成ＡＩの力を借りることで、ある分野のスペシャリストでも別の分野に一定のレベルで足を踏み入れることが可能になってきています。このことが業務範囲の拡大を可能にし、今までの細分化された業務がより統合された形に変化していくでしょう。

例えば、広告制作の現場で見ると、コピーライターが自身で作成したコピーにあったデザインやグラフィックを生成ＡＩにより一定レベルまで自分で作成することが可能になります。これにより、アイデアが直接形になる速度が大幅に上がり、よりスムーズな制作フローが実現します。

また、営業の現場では、今まで顧客との交渉のみを行っていた営業マンが、自身で聞き取った顧客のニーズに基づいて生成ＡＩを利用し、サービスのプロトタイプを作成することが可能になります。これにより、営業と開発の間のコミュニケーションのズレが減り、顧客ニーズにより忠実なサービスが開発されるでしょう。

さらに、医療の現場では、医師が診断や治療方針を決定するだけでなく、生成ＡＩを利用して、薬剤師の役割であった患者への薬の説明や、看護師の役割であったケアの指示なども一定のレベルで行えるようになります。これにより、患者への一貫したケアが提供できる可能性があります。

これらはすべて、１人の業務範囲が急激に広がることを示しています。ただし、ここで重要なのは、全ての業務が一つに統一されるということではなく、専門性を根ざすことの重要性は依然として変わらないという点です。

しかし、それと同時に、その専門性の周辺にも手を広げることができ、それが業務の効率化や質の向上につながるのです。

このように、専門性と一定の広がりを持った業務範囲をバランス良く持つことで、一人一人がさらなる価値を提供できるようになるでしょう。

そして、それぞれが自分の専門性を活かしながらも、他の役割の業務にも一定の理解を持つことで、全体としての相乗効果が高まり、より質の高い成果を生むことが可能になるでしょう。

### **４　業務のやり方の変化　―完成する前に見せるのが当たり前―**

今度は「業務のやり方」の変化です。いわゆるＨＯＷの領域です。

私たちがこれまで経験してきた仕事の方法は、ある程度の完成度を必要としてきました。何かを他人に見せる前には、必ず一定のレベルに仕上げるというのが暗黙のルールでした。

例えば、サラリーマンが企画書を上司に見せる際には、少なくとも「このページには何を書こうと考えているか」をメモレベルで完成させる必要がありました。これは企画のアイデアを他人に理解してもらうための必要最低限の完成度でした。

また、デザイナーがホームページのデザインをクライアントに提示する際も、少なくともトップページのイメージを具現化した状態で見せることが求められていました。

また、建築家が建物の設計図をクライアントに見せる際には、外観や間取りの詳細をまとめ、一定の視覚的な理解を促すための図面や３Ｄモデルが必要でした。

同様に、映画の監督がスクリプトをプロデューサーやキャストに提示する際には、登場人物の描写やストーリーの流れ、シーンの詳細な描写を完璧に整理していることが求められていました。

これらの状況は全て、アイデアや作業成果が一定の完成度（おおよそ５０点から７０点バージョン）に達して初めて他人に見せる、という常識を反映しています。

しかし、生成ＡＩの存在により、この概念は大きく覆されようとしています。

生成ＡＩの力を借りれば、１０点バージョンでもアイデアを共有し、フィードバックを受けることが可能となります。

「この業界のお客さんに、この商品を提案したい。競合と迷っているため、どこが違うのかを強調したい」という程度の大まかな要件でも、ＡＩはそれに基づいた企画書の草案を生成することができます。

デザイナーであれば、大まかなデザインコンセプトと色の感じだけで、初期のデザインプロトタイプを生成し、それをクライアントやチームメンバーに見せ、フィードバックを得ることができます。

同様に、建築家も基本的な要望と土地の情報だけで、ＡＩに初期の設計図を作成させることが可能です。

これにより、アイデアや作業成果を早い段階で共有し、フィードバックを得ることができます。生成ＡＩの利用により、作業の完成度を高めるためのプロセスがスピードアップし、それによって最終的なクオリティが上がる速度も加速します。

生成ＡＩは新しい形の協働を可能にし、仕事の進め方や成果物のクオリティを向上させます。これにより、私たちの働き方は大きく変わるでしょう。今までの完成度重視から、よりフレキシブルで迅速な反復的なプロセスへと移行していくのです。

### **５　サービスの変化　―究極のパーソナライズ化が起こる―**

最後は「サービスの変化」です。

私たちはこれまで、ある程度広範なニーズに対応するようなサービスを受けてきました。これはサービス提供者が全ての顧客に個別対応することが困難であり、高コストだからです。

あなたがＷｅｂ上のグルメサイトを使って飲食店を探すとき、その検索軸は価格、エリア、ジャンルなど、一般的に多くの人が考えそうなカテゴリに限定されます。

その理由はシンプルで、サービス提供者は顧客一人ひとりの特定のニーズに対応するのではなく、「みんながある程度満足する」を目指してサービスを設計しているからです。

しかし、本質的には人それぞれのニーズは異なります。例えば、「今日は座席が広い、上司の好きな蕎麦がメニューにあり、自然派ワインを出している居酒屋を探したい」といった具体的な希望に、現状のサービスは的確に対応できません。

生成ＡＩの出現により、この状況は大きく変化しようとしています。生成ＡＩはパーソナライズされたサービスを提供することで、各人の個別最適な解を見つけることが可能です。つまり、その人その人のニーズに対して最適な答えを提供します。

例えば、先ほどの飲食店探しのような具体的な要求に対して、生成ＡＩは個々の要素を理解し、それに最適な店舗を提案することが可能です。

さらに、「私は高級な食事を好むが、タバコは嫌いで、騒がしい居酒屋も避けたい」といった個人の特性を生成ＡＩに教えることで、それに合わせた推薦を受けることが可能となります。

これはＢｔｏＣ（ビジネス・トゥ・カスタマー）のサービスだけでなく、ＢｔｏＢ（ビジネス・トゥ・ビジネス）でも同様です。

例えば、業務システムはこれまで一律に設計され、全員が同じＵＩ・ＵＸ（ユーザーインターフェース／ユーザーエクスペリエンス）を使用していました。

しかし生成ＡＩの進化により、各ユーザーに合わせたカスタマイズが可能になり、その人にとって最も使いやすい形に変化することができます。

つまり、生成ＡＩの進化は、本当の意味でのパーソナライズ化を可能にします。それにより、各サービスが一人一人にとって特別なものになります。これは、今後私たちが受けるサービスがどのように変わっていくのか、その一端を示しています。これまでの一律的なサービスから、個々のニーズに対応したパーソナライズ化されたサービスへと変化していくでしょう。

## **人間と生成ＡＩの役割**

ここまで、５つの観点から仕事の変化を見てきました。

生成ＡＩの進化に伴い、私たちの仕事がどのように変わるのか、様々な予想や議論がなされています。その中でも、多く見受けられるのが「生成ＡＩによってなくなる仕事」というタイトルの記事や報告書です。しかし、本当に私たちは生成ＡＩに仕事を奪われるのでしょうか？

私の見解は「あまりそう考える必要はない」というものです。もちろん、一部の仕事が自動化やＡＩ化によってなくなる可能性はありますが、同時に新しい仕事が生まれてきます。

生成ＡＩは単純に「人間の仕事を奪う」ための技術ではなく、「人間の生活を豊かにする」ための技術として進化していくでしょう。

電卓が開発されたときの事例を思い出してみてください。電卓が開発されると、そろばんでの計算を必要とする仕事は少なくなりましたが、一方で、電卓を使って複雑な計算を行う新しい業務が生まれました。

そして、電卓を活用することで、それまで手作業では困難だった大規模な計算も可能になり、新たな企画やアイデアが生まれました。

同様に、生成ＡＩによって自動化できる業務が増える一方で、新たな業務が生まれ、新しい価値を生み出す可能性があります。むしろ、生成ＡＩの存在により私たちはこれまで以上にクリエイティブな活動に時間を使えるようになります。

では、この流れの中で、人間と生成ＡＩが、それぞれどのような役割を担っていくかを考えるのが重要だと思うので、見ていきましょう。

**生成ＡＩの役割　―幅広いアウトプット側を担う―**

まず、生成ＡＩの役割とは何でしょうか。この問いに答える前に、生成ＡＩの基本的な特性を理解する必要があります。

生成ＡＩは、その名の通り、何らかの「生成」を行うＡＩです。具体的には、人間から与えられたある種の情報やデータ（インプット）をもとに、新たな内容や結果（アウトプット）を生み出します。

それは文章かもしれませんし、画像かもしれませんし、あるいは新たなアイデアや提案かもしれません。そして、このインプットからアウトプットへのプロセスは、生成ＡＩの主要な役割を成しています。

この役割は、大きく「抽出」、「編集」、「表現」の３つに分けて考えることができます。それぞれの役割について、具体的な例を交えながら詳しく見ていきましょう。

まずは「抽出」について見てみましょう。生成ＡＩは、膨大な量のデータから必要な情報を素早く、そして精度高く抽出することが可能です。

先ほど述べた飲食店の例を思い出してください。ユーザーから言われた情報をもとに、最適な飲食店を「抽出」します。

他にも、例えばインターネット上に散らばるニュース記事から、特定のキーワードに関連する情報を「抽出」することも可能です。このように、生成ＡＩは情報の海から目的に沿った情報を的確に「抽出」する役割を担っています。

次に、「編集」です。生成ＡＩは情報をもとに、それを必要な形に変形したり、整理したりすることが可能です。

例えば、会議での長い議論を短い要約に「編集」したり、大量の文章データから重要なキーワードやテーマを抽出して整理したりします。

さらに、ある画像を基に、その画像に似た新たな画像を生成（編集）することもできます。これらの「編集」作業は人間が行うと時間がかかるものですが、生成ＡＩはその時間を大幅に短縮します。

そして最後に「表現」です。これが生成ＡＩの最も重要な役割であり、最も大きな特徴です。生成ＡＩは新たなアイデアを生み出したり、新たな情報を生成したりすることができます。

例えば、既存の商品データから新しい商品アイデアを生成すること、またあるテーマに基づいて新たな記事や報告書を生成することも可能です。また、特定の条件を満たす新しい画像や動画を生成することもできます。

これらの新しい「表現」は、人間が思考して創造するよりも遥かに早く、多くのアイデアや内容を生成することが可能です。

以上のように、生成ＡＩは「抽出」、「編集」、「表現」の３つの役割を担っています。そして、これらの役割は全て、アウトプット側を担っていると言えます。

生成ＡＩがどのようなタスクをどのように処理するかを理解することで、どのような業務に生成ＡＩを活用すべきか、そして人間がどのような役割を担うべきかが見えてくるはずです。

**人間の役割　―目的や意思を込めたインプット側を担う―**

それでは生成ＡＩが進化する中で、人間の役割はどのように変化し、また新たな形となっていくのでしょうか。

先ほど、生成ＡＩがアウトプット側の役割を担うと述べました。では当然、人間はインプット側の役割を担うということになります。ただし、これは少々抽象的な表現なので、より具体的に人間の役割を明らかにしていきましょう。

私は、人間の役割を「目的の設定」、「方針の決定」、「最適なＵＩの設計」の３つに整理しています。それぞれの要素を詳しく見ていきましょう。

まず「目的の設定」について考えます。要するに、なんのためにこのアウトプットをするのかというものです。

例えば、「会議の議事録をまとめて」というインプットを一つとります。その目的は、「新人に見せて勉強させるため」かもしれません。あるいは、「社長に見せて評価してもらうため」かもしれません。

これらの目的は、インプットする側の人間にしか分からないし、絶対的な正解なんてどこにもありません。そのため、この「目的の設定」は人間が担うべき役割であり、それは人間が存在する意味でもあります。

次に「方針の決定」です。これは目的とも関連性がありますが、もし目的を「ＷＨＹ」とするなら、方針はそれをどうアウトプットするか、つまり「ＨＯＷ」という意味合いになります。

先ほどの「新人に見せて勉強させるために議事録をまとめる」という場合でも、そのアウトプットの方法は複数考えられます。クイズ形式にするのか、アバター同士がしゃべっている会議のように動画を作成するのか、その方針は人間が決めるべきです。

このアイデア自体は生成ＡＩに編集してもらって磨き上げることも可能ですが、どういう方針にするかは、同じく正解はなく、人間が決定するべきでしょう。

最後に「最適なＵＩの設計」です。これは非常に重要な役割です。現在、生成ＡＩへのインプットは主に「人間の言語」に統一されていますが、将来的には多様な方法が可能になるでしょう。その時、どのシーンでどのようなインプットが最適なのかを考えることが求められます。

具体的な例を出しましょう。例えば、飲食店を探す際、インプットとして「食べた後思わずこんなリアクションをとってしまうお店」と動画で指示する方法があるかもしれません。

もしくは、「こんな席で、こういうオシャレな風景で」というイラストを描く方法もあります。

他のシーンでも、生成ＡＩへのインプットは、踊った動画をアップロードしたり、一定のリズムの音楽をアップロードしたり、歌を歌ったりといった方法が最適なシーンもあるかもしれません。

そのようなシーンごとに、どのようなインプットが最適なのかを設計する役割は、合理性だけでなく非合理的な人間の感性やインサイトをも考慮に入れる必要があります。

そのため、これもまた人間が担うべき役割でしょう。

生成ＡＩと人間は、それぞれ異なる役割を担うことで、より良いアウトプットを生み出すことができます。生成ＡＩが幅広いアウトプットをできる一方で、人間は目的や方針を設定し、最適なインプットをデザインすることで、このシステム全体を動かす大切な存在です。このような共存と協働の中で、我々の社会は更なる進化を遂げていくことでしょう。

**本章のまとめ**

* 仕事が変わる５つの観点
  + 既存の業務：フォーマット化している業務は、機械が人間に合わせるようになる
  + 新たな業務：新たなデータの取り方を考える業務が求められる
  + 業務の範囲：１人が担う業務の範囲が急拡大する
  + 業務のやり方：完成する前に見せるのが当たり前になる
  + サービス：究極のパーソナライズ化（個人ごとのサービス化）が起こる
* 生成ＡＩと人間の役割の違い
  + 生成ＡＩ：アウトプットを担う役割。特徴は「抽出」・「編集」・「表現」。
  + 人間：インプットを担う役割。特徴は「目的の設定」・「方針の決定」・「最適なＵＩの設計」

# **第三章　生成ＡＩによる人材の変化**

## **本章で説明すること**

これまでの議論を通じて、私たちは様々な視点から生成ＡＩの進化とその影響を探求してきました。第一章では、私たちの価値観や思考の変化に焦点を当て、第二章では、私たちの仕事の変化を詳細に考察しました。

次の視点は「人材」の変化です。第三章では、このテーマを深く掘り下げていきたいと思います。具体的には、生成ＡＩが一定程度浸透してきた状況において、どのような人材が価値を発揮できるのか、どのようなスキルが求められるのかという観点を探求していきます。

生成ＡＩの進化は、労働市場や教育システムにも大きな影響を与えるでしょう。その結果として、私たちがどのようなスキルや知識を身につけるべきなのか、どのようなキャリアを積むべきなのかという観念も変わるかもしれません。

そして、それは単なる個々のキャリア観にとどまらず、教育制度や人材育成のアプローチ、企業の人材マネジメントにも影響を与えるでしょう。

もちろん、ここで語る内容には絶対的な正解は存在しません。しかし、これまでの変化を捉え、将来への予測を試みることで、私たちのこれからの行動や決断に寄与できると考えています。

この第三章では、そうした視点から、まずは人材のスキル・スタンス・行動の変化を考察し、その上で教育やキャリア観がどう変化するのかを説明していきましょう。

## **スキル・スタンス・行動の変化**

### **スキルの変化　―これからの時代で求められることは分解力―**

まず考えるのは「スキル」についての議論です。ここで言う「スキル」とは、具体的なプログラミング言語（例えばＰｙｔｈｏｎ）を習得する、といった具体的な能力ではなく、より抽象的で汎用的な能力を指します。

そして、その中でも特に重要なのが「物事を極限まで分解できるスキル」です。何故これが重要なのか、それについて考察していきましょう。

生成ＡＩと人間の役割を再度おさらいしましょう。生成ＡＩは主にアウトプット側、人間はインプット側の役割を担っています。この配分の理由は明確です。

生成ＡＩは短時間で無限のアウトプットを生み出すことができるのに対し、人間の役割はどの点でアウトプットを出してほしいのか、つまり焦点を定めることです。

ここで重要なのが、その焦点はできるだけ小さく、具体的な１点であるほうが良いということです。

例えば、「上司に提案する新規事業のプレゼン資料を作って」という指示ではなく

* リスクを気にする４０歳の課長（その上には部長と役員がいる）に
* ３０分の会議で１０分間
* 新規事業をプレゼンする為の資料を作って
* ここでのゴールは決定ではなく、方向性を合意すること

という具体的な指示の方が、生成ＡＩは高精度のアウトプットを出すことができます。

もう一つの例を挙げてみましょう。「新商品の販売計画を立てて」という依頼ではなく、

* 新商品の発売日が４ヶ月後で
* そのままでは店舗に商品が間に合わない可能性がある
* だから、具体的にどの製造ラインをどれだけ増設すべきか
* どの時間帯にどれだけ生産すべきかを示す計画を作って

というような具体的な指示になると、生成ＡＩは適切な提案をすることができます。

さらに、もう一つ。「次の会議での発表資料を作って」という依頼よりも、

* 次の会議は過去の業績報告で
* 各部門から３分ずつ話す時間があります
* 私たちはマーケティング部門なので、過去３ヶ月の主要なマーケティング活動とその成果を
* わかりやすく視覚的に示す資料を作って

と具体的に依頼した方が、生成ＡＩはより具体的で役立つアウトプットを提供できます。

このように、人間が役割として果たすべきは、自分が思っている地点をできるだけ具体的に分解し、それを言葉にすることです。

このスキルが物事を分解する力、つまり思考を具体化し、それを言葉にする力であり、これが今後ますます重要となってくるでしょう。

生成ＡＩが存在しない時代では、このプロセスはしばしば我々の頭の中で自動的に行われていました。

しかし、生成ＡＩが身近な存在となった今日では、その思考を明確に言葉にし、生成ＡＩにインプットするスキルがますます重要となります。

だからこそ、私たちは「物事を極限まで分解できるスキル」の育成に注力するべきなのです。

### **スタンスの変化　―自分の想いをのせた目的と意思を持つこと―**

この節では、前節で説明した「物事を極限まで分解できるスキル」に続き、「スタンス」について考察していきたいと思います。ここでのスタンスとは、生成ＡＩとの関わり方や意識の持ち方、そして私たちがどのような意識を持って取り組むべきかについての視点を指します。

前章で生成ＡＩと人間のスキルの違い、そして第一章で説明した０から１を創り出す重要性について触れました。

その中で、生成ＡＩが最も欠けているもの、そして生成ＡＩがやろうと思ってもできないことは何でしょうか。それは、「自分の想いをのせた目的や意思」を持つことです。

この「自分の想いをのせた目的や意思」とは具体的に何を指すのでしょうか。詳しく見ていきましょう。

まず考えられるのは、生成ＡＩにも設定可能な「平均的な目的」です。例えば営業担当であれば、「自分の営業成績を最大化して、評価を上げたい」という通常の目的を持つはずです。そうした目的を生成ＡＩにセットし、特定のタスクを実行させることは可能かもしれません。

しかし、ここで問われるのは「自分の想いをのせた目的や意思」、つまり、平均的な考え方からはずれ、その人自身の強い意思が反映された目的です。

営業担当の例で言えば、「そもそも営業成績で人の優劣を決めることが嫌いなので、営業成績と評価が連動しないような仕組みにしたい」というような考え方です。

これは平均値から外れた、個々の強い意志が現れる異常値であり、ここに目的や意思を置いて生成ＡＩを使うことで、より有効的な利用が可能になります。

なぜなら、これがその人の「やりたいこと」、「やりたくないこと」、「好きなこと」、「嫌いなこと」など、強い意思が反映された目的や意思であり、それを持つことで生成ＡＩを自己の価値観やビジョンに基づいて動かすことができるからです。

そのため、生成ＡＩと付き合っていくための重要なスタンスとして、自分の想いをのせた目的や意思をいかに明確に設定できるかが問われます。

ここで一部の人々は、技術進化によりこの問題も解決できるのではないかと反論するかもしれませんが、私は永遠に生成ＡＩにはできないと考えています。

その理由は、人間がそれを求めていないからです。私たちはＡＩに自分自身の深層心理や感情を理解し、それを反映した意思決定をすることは期待していません。私たちがＡＩに求めるのは、私たち自身の「想いをのせた目的や意思」を具現化する手段であること。

そのため、自己の意志や価値観を明確に把握し、それを基に目的や意思を設定するというスタンスが、生成ＡＩと人間との関わり方において重要となるのです。

### **行動の変化　―効率化を図るだけではなく、価値を掛け算で増やす**

前節では、「スキル」と「スタンス」の変化を説明しました。今回の節では、その２つを持った上で、どのような行動ができると良い人材なのかについて考えてみたいと思います。

生成ＡＩを使いこなせる人材とはどのような存在でしょうか。私はそれらの人材を２つのカテゴリーに分けると考えています。

まず一つ目は、「これまでやっていたことを、生成ＡＩを使ってひたすら効率化できる人」です。これは容易にイメージできると思います。

例えば、

* これまで人力でとっていた議事録を自動で取り、要約をまとめる
* 広告のキャッチコピーの案を１００個生成する
* メール文面や記事の文字を校正する
* プログラミングの間違いをチェックする

などの作業を、生成ＡＩを用いて高速化・自動化することができます。このようなＡＩの活用方法は多くの本や雑誌で紹介されているもので、日々の業務の効率化を追求する人材がこの分類に当たると言えるでしょう。

次に二つ目は、「生成ＡＩを使って、掛け算方式で指数関数的に価値を増やしていく人」です。こちらは少しイメージしづらいかもしれませんが、以下の例を考えてみてください。

「クレームを受けつけるコールセンター」での生成ＡＩの活用を考えてみましょう。一つ目の効率化の例であれば、「クレームの対応・回答を生成ＡＩに行ってもらう」等が考えられるでしょう。

しかし、生成ＡＩを更に活用するためには、顧客のクレームを生成ＡＩによって収集し、それを要約して商品開発にフィードバックすることも可能です。さらに、商品開発部門の開発予定などを生成ＡＩにインプットさせ、クレームが来た際に「それはあと１か月で改善される予定です」などと返答することも可能になります。

こうすることで、単なる効率化から一歩進んで、生成ＡＩによって関わる全ての人々の価値が増えるという構造を作り出すことが可能になります。ただし、この行動を起こすためには、生成ＡＩを単なるサポート者としてではなく、協働者として扱う視点が不可欠です。

前者の効率化はもちろん非常に重要な行動ではありますが、本質的には後者の「価値を増やす」ことが最も重要だと私は考えています。なぜなら、生成ＡＩは「生成」ＡＩであり、何かを創り出すために使わなければ、本当の価値を発揮しきれないからです。

したがって、生成ＡＩを協働者として活用し、その力を用いて自分自身や組織全体の価値を増やすための行動をとることが、これからの人材に求められるスキルと言えるでしょう。

今までの常識や方法論にとらわれず、新たな技術を柔軟に活用して新たな価値を創出する、そんな行動力がこれからの時代をリードするキーとなるのです。

しかしながら、この行動をとるためには、一定のスキルとスタンスが必要になります。そのためここで紹介した３つの要素が大事になると思います。

## **教育やキャリアにおける生成ＡＩの影響**

### **相対的に価値が下がること　―「詳しい」は意味をなさなくなる―**

まず、生成ＡＩの普及と進化により、「知識」そのものの価値が相対的に低下するという変化が教育やキャリアの世界にも波及するでしょう。これは、かつて「情報は力だ」と言われた時代から大きくシフトしていることを示しています。

インターネットの発展によってすでに「情報を知る」ことは誰にでも可能となり、情報そのものの価値は相対的に下がりました。知識を持つことだけではなく、それをどう活用するか、どういう視点で解釈するかが重要になってきたのです。

そして今、その一歩先を行くのが生成ＡＩです。ここまで紹介してきた通り、生成ＡＩはただ情報を知るだけでなく、その情報を基に新たな内容を生成、つまり「アウトプット」することができます。

これまで教育やキャリアでは、特定の業界や分野に精通し、その知識をもとに具体的な解答や提案をするという能力が高く評価されてきました。特にコンサルティング業界ではそのような能力が重要視され、知識や経験が直接大きな対価を生んできました。

しかし、これまで人間の領域とされてきた「知識からのアウトプット」も生成ＡＩが手がけるようになれば、その価値観も変わります。

マーケティングの領域を例にとると、様々な理論やフレームワークを知り、それを活用して課題解決に取り組むコンサルタントの能力は一定の価値を持ってきました。

しかし、それと同等かそれ以上の価値を生成ＡＩが提供できる可能性があります。最適なマーケティングフレームワークをＡＩが選択し、具体的な事例や最新のデータを活用して解説を提供することができれば、それが一定の効果をもたらすでしょう。

ただし、これは「何かを知っていること」や「特定の業界に詳しいこと」が価値を持つ時代が終わるという意味ではなく、よりＡＩと協働し、その力を活用して価値を生み出す能力が重視される時代が訪れるということを示しています。

生成ＡＩの進化を踏まえると、教育やキャリアのあり方について改めて見直すべき時期に来ているのかもしれません。知識そのものの価値が変動することは、教育の形やキャリアの道筋も変えていくでしょう。

### **相対的に価値が上がること　―「何か違う」という観の重要性が増す―**

生成ＡＩの浸透に伴い、教育やキャリアにおける「知識」の相対的な価値が下がる一方で、「観」の価値が高まると言われています。「観」には多くの意味がありますが、ここでは「経験からくる直観や洞察」と定義しましょう。これは単なる思いつきではなく、個々の経験と感覚から生まれる洞察のことを指します。

この「観」は、「自分の経験からすると何かがうまくいきそうだ、あるいはうまくいかなそうだ」という微妙な感覚を表します。これは非常に主観的なものであり、その人だけが持っている独自の視点や感覚を表しています。

例えば、ビジネスの場で、営業担当が見込み客との会議の中で「このクライアントは我々の提案に対して少しでも疑問を感じている」という「観」を持つこともあります。これは顔色、言葉の選び方、会話の流れなどから得られる情報に基づいているかもしれません。他の人にはわからないかもしれませんが、そのセールス担当者にとっては、何かがうまくいかなそうだと感じられる瞬間です。

この感覚や直観、つまり「観」は、生成ＡＩがまだ捉えることができない領域です。ＡＩは大量のデータを分析し、パターンを見つけ出し、新たな知識を生成することができますが、人間の脳が持つ豊かな感情や経験から生まれる直観を理解することはまだ難しいのです。

この「何か違う」という感覚は、その人が過去に経験したこと、感じたこと、考えたことといった膨大な量の情報を瞬時に処理し、出力される結果です。

それは具体的な一つの経験に基づくものかもしれませんし、様々な経験や情報が組み合わさって生まれるものかもしれません。

あらゆる情報を踏まえて出力できる生成ＡＩに対して、その人の経験や脳にある情報だけで出力する違和感。それは非常に限定的で主観的なものかもしれませんが、だからこそ価値があるのです。

それは人間特有の洞察力や感性、直感を表し、しばしば正確な判断や新たなアイデアを生み出します。

ＡＩの発展と共に、教育やキャリアにおける価値観が変化している中で、人間特有の「観」の価値がますます高まることは、我々が持つ豊かな経験や感覚、直観の力を改めて認識する機会でもあります。これらは生成ＡＩにはまだ追いつけない、人間だけが持つ独特の価値と言えるでしょう。

### **教育やキャリアで重要なこと　―自分で意思決定をする経験を増やす―**

この章は、これまでの変化を踏まえて、教育やキャリアでどんな経験が大事なのかを考察し、締めたいと思います。

知識の価値が相対的に下がり、経験からくる直観や洞察、すなわち「観」の価値が増す中で、特に重視されるようになるのが、「自分で意思決定をする経験の数」であると考えられます。

この意思決定は大小問わず、日々の些細なことから人生を左右するような大きな決断まで、さまざまなものが含まれます。

大きな資金を投資するかどうかといった大きな決断もそうですし、友人間の口論をどう解決するかといった小さな決断も、同様に意思決定の経験となるのです。

ただ、その意思決定はただ行うだけではなく、自分なりの仮説や理由を持って行うことが重要です。それは自身の経験と感覚が結びつき、一つ一つの意思決定が脳に刻み込まれ、良し悪しの結果が自分の「脳のデータベース」に蓄積されていくことを意味します。

そして、それらが結果的に「観」となり、あらゆるシーンでの違和感や直感を生み出す素地となります。

他人の意思決定に流されることなく、何となくの決定を避けることも重要です。これらは自身の直観や感覚を鍛える原料にはならず、自身の「観」を形成する上で意味を持ちません。これは、自己の意思決定が脳に刻まれず、その結果としての学びや経験が得られないためです。

「自分で意思決定できる機会なんて、身の回りにはないよ」と感じる人もいるかもしれません。しかし、実際には日常生活の中には無数の意思決定の機会が溢れています。

会議のゴール設定や口論の解決方法、さらには「今日の夜ごはんは何にしよう？」という日常の選択さえも、適切な仮説や理由があれば一つの意思決定となります。

生成ＡＩが一層浸透していく未来において、教育やキャリアでは、自身で意思決定をする経験の数を増やすことが重要になるでしょう。その一つ一つが自分だけの「観」を形成し、人間特有の直観や感覚を高め、ＡＩと共存し、またその中で自身の価値を高めていくための、重要なステップとなるのです。

**本章のまとめ**

* 人材のスキル・スタンス・行動の変化
  + 求められるスキルは「物事を極限まで分解できるスキル」
  + 求められるスタンスは、「自分の想いをのせた目的と意思を持つこと」
  + 生成ＡＩを使って、効率化を図るだけではなく、価値を掛け算で増やす行動が重要
* 教育やキャリアにおける変化
  + 「知識を持っていること」は、相対的に価値が下がる。
  + 「何か違う」という直観や洞察は、相対的に価値が上がる
  + これらを踏まえて、自分で意思決定をする経験を増やすことが重要

# **第四章　生成ＡＩによる企業の変化**

## **本章で説明すること**

さて、これからは生成ＡＩの進化が企業にもたらす変化について探りたいと思います。この章では、企業がどのような変革を経験するのかという仮説を説明します。

視点は大きく二つ、一つは「企業の戦略の変化」、もう一つは「ＨＲ（ヒューマンリソース）の変化」です。企業の経営者であれば自社の戦略や人材マネジメントを見直すきっかけに、サラリーマンの方であれば自分が所属する組織や企業の動きに注目するきっかけにしていただければ幸いです。

生成ＡＩの発達は、企業の業務フローにおける多くの変化をもたらします。その影響はビジネスモデルや業界によって細かな違いはあるかもしれませんが、私たちがここで語るのはより抽象的な視点からの変化です。

具体的には、企業全体としてどのように生成ＡＩを統合していくべきなのか、また人間の役割はどのように変わりうるのかという視点から説明を進めます。

例えば、あなたが自動車製造業の一部門で働いているとします。生成ＡＩの出現により、製品設計から製造ラインの自動化、さらにはマーケティングまで、業務の多くが大きく変わる可能性があります。

しかし、ここで注目すべきは、そのような具体的な業務変化だけでなく、それらが全体として企業にどのような影響をもたらすか、また、その変化にどのように対応していくべきかという戦略的な視点です。

また、ＨＲの視点から見れば、生成ＡＩによる仕事の変化は、企業が求めるスキルセットや人材の在り方、さらには組織全体の形状まで変えるでしょう。

例えば、繰り返しの作業を生成ＡＩが代行するようになれば、従業員が扱うべき業務は複雑性や創造性を必要とするものへとシフトします。その結果、従業員一人ひとりの役割や評価基準、教育・育成の方法等に大きな変化が求められるでしょう。

さらには、生成ＡＩが従業員のパートナーとなり、共同で業務を遂行するような形態も考えられます。その場合、ＡＩとの協働をスムーズに行える能力が求められ、それは従来のスキルセットとは異なる新たな人材像を企業に提示することになります。

このような企業の戦略の変化とＨＲの変化は、企業が生成ＡＩの波を乗り越えていく上で欠かせない視点です。個々の業務がどのように変わるかを考えるだけでなく、それが全体として企業にもたらす影響と、その対応策を戦略的に考える必要があります。

また、人間の役割と人材育成の視点からも、これまでとは異なる新たなアプローチが求められます。それでは、具体的にそれぞれについて見ていきましょう。

## **企業戦略の変化**

### **経営戦略の変化　―究極のパーソナライズ化を目指す―**

第四章「生成ＡＩによる企業の変化」の一部として、ここではまず「企業の戦略の変化」の一角、経営戦略の観点からその影響を探りたいと思います。

具体的には、生成ＡＩが経営戦略にどのような変革をもたらすのか。それは一言で言うと、「究極のパーソナライズ化を目指す」という方向性について解説します。

現代のマーケティングは、かつての単なる製品やサービスの売り込みから顧客満足を追求する段階を経て、現在は顧客の成功や顧客の目指す未来の実現を目指す段階に至っています。

そして我々が予測するのは、その次のステップとして、顧客が本当に求めているもの、それは「自分だけのために、自分専用の商品やサービスを作ってくれること」へと向かう、ということです。これは、顧客一人ひとりに対する究極のパーソナライズ化を目指すという経営戦略です。

それは画一的な商品やサービスではなく、個々の顧客のニーズに完全に合わせてカスタマイズされた商品やサービスを提供するという戦略です。

前の章でも例に出しましたが、例えば飲食店を探す時、人によっては料理の画像だけで探したい人もいるでしょうし、人によっては一方的に要求だけして、勝手に予約して欲しい人もいるでしょう。

また、もちろん今の比較サイトのように価格や評価から選びたい人もいるでしょう。そういった個々のニーズに合わせて、サービス自体の形も変わっていくようなイメージです。

また、とあるｙｏｕｔｕｂｅで「ホストは究極のサービス業」という説明を目にしましたが、まさにこの話と近いことだと思います。ホストの仕事は、お客さん一人ひとりのために時間を割き、その人の求めていることを完全に理解し、そのニーズに対応するという究極のパーソナライズ化を実現する業種だと言えます。

同様の考え方をＢｔｏＢの世界にも当てはめてみましょう。例えば、ある企業が特定のＩＴソリューションを提供しているとします。生成ＡＩの発達により、このＩＴソリューションプロバイダーは、単に「製品」を提供するだけでなく、顧客企業の業績向上や業務効率化に具体的に貢献するための、顧客企業にとって最適化されたソリューションを提供することが可能となるでしょう。

一方、教育業界では、すでにこの変化が起きています。かつては全員が共通の教科書や教材を使っていましたが、最近では生徒一人ひとりの間違えやすい箇所に合わせて出す問題や、学習内容が個別にカスタマイズされる傾向があります。

生成ＡＩの進化により、これがさらに進化し、「この子にとって最も答えづらい問題を作る」や「この子が最も理解しやすい説明の教材を作る」といった、より高度なパーソナライズ化が可能となるでしょう。

これらは一例に過ぎませんが、生成ＡＩの進化により「究極のパーソナライズ化」が実現可能になるとともに、企業の経営戦略が大きく変わることが予想されます。それは顧客との関係性を一層深め、そのニーズを直接的に満たすことで顧客の成功を実現するという、新しい経営のパラダイムを提示するものです。

### **事業戦略（既存）の変化　―今ない情報をデータ化して、顧客体験を向上―**

ここでは、「既存事業戦略の変化」に焦点を当てます。ここでは前節で説明した「究極のパーソナライズ化を目指す」という経営戦略の変化を受けて、「既存事業の戦略がどのように変化するか」を詳細に掘り下げていきます。

究極のパーソナライズ化を達成するためには、主に２つの重要な要素が存在します。その具体的なイメージを形成するために、ここでも「飲食店を探すＷＥＢサービス」を例にして説明を進めていきましょう。

まず一つ目の要素は、「既に自社で持っているデータを生成ＡＩに組み込んで、そのサービス専用の生成ＡＩを作る」ということです。

飲食店を探すＷＥＢサービスの場合、メニュー・価格・立地・評価・支払い方法など、すでにサービス上に載っている情報を全てデータとして生成ＡＩに学ばせます。そうすることで、各顧客に対して最適化された情報の「抽出」・「編集」・「表現」が可能になります。これは前章で説明した生成ＡＩの役割を具体的に表現したものです。

ただし、これはあくまで今のサービスがパーソナライズ化されただけであり、パーソナライズ化の真の可能性はこれだけに留まりません。その真の可能性を引き出すための、二つ目の重要な要素が「今持っていない（データ化できていない）情報を、データ化していく」ということです。

飲食店選びにおいて重要な要素というのは人それぞれであり、店のメニューや価格だけでなく、「箸を出してくれるか」、「店内から良い匂いがするか」、「店内の温度や湿度はどのくらいか」等も、人によっては重要な選択基準になるかもしれません。このようなニッチな情報もデータ化すれば、より深いレベルでのパーソナライズ化が可能となります。

ただし、これらの情報をすべてデータ化するというのは現実的には困難です。例えば、全ての飲食店に営業担当が回って、その全ての情報を収集・データ化するというのは時間も人手も莫大に必要となります。そこで必要になるのが、効率的な情報収集の方法やデータ化の技術です。これにはＡＩ技術の進化が欠かせません。

以上を踏まえると、「究極のパーソナライズ化を目指す」ための既存事業戦略として、「自社のデータを生成ＡＩに組み込む」・「まだデータ化できていない情報を、データ化する」という２点が重要になってきます。

これらの手法により、自社の商品やサービスをユーザーに最適化し、その結果ユーザー体験を大幅に向上させることが可能となります。

なお、このようなデータ収集と利用は、プライバシー保護や情報管理の観点からも注意が必要です。ユーザーの許可を得た上でのデータ収集と、そのデータの適切な管理・利用が求められます。

この章で述べたように、生成ＡＩの技術進化は企業の経営戦略や既存事業戦略に大きな影響を与えます。しかし、それだけでなく、新たな事業やビジネスモデルの創出にも寄与する可能性があります。次節では、その可能性について探ります。

### **事業戦略（新規）の変化　―全てのユーザーが参加可能なビジネス―**

これまでの新規事業の戦略というのは、一般的には既存の顧客に対して別の商品やサービスを提供する、あるいは自社の技術や特性を活かして別の顧客に商品やサービスを提供するという形でした。

しかし、生成ＡＩの登場により、新たな新規事業戦略が考えられるようになりました。それは、「自社が提供していたサービスを、顧客自身にも提供させる」ことで、市場の拡大と同時に新たなビジネスモデルの創出を可能にする戦略です。

例えば、出版社という産業を考えてみましょう。これまで出版社はプロの漫画家や小説家から作品を買い取り、読者に提供するという形態が主流でした。

しかし、生成ＡＩを使えば、「読者が専門的なスキルがなくても、生成ＡＩを使って漫画や小説を書けるようにするサービス」を提供することが可能になります。これにより、読者は消費者だけでなく、作品の提供者にもなることができ、市場の規模は大幅に拡大します。

また、食品メーカーも同様の戦略を取ることが可能です。「消費者が専門的なスキルがなくても、生成ＡＩを使って新しい商品を企業に提案できるサービス」を提供すれば、消費者は単なる商品の受け手ではなく、新商品のアイデアを提供する存在にもなり得ます。

さらには、ファッションブランドが「自社のスタイルを学習した生成ＡＩを使って、消費者がオリジナルの服をデザインできるサービス」を提供したり、旅行会社が「自社のパッケージツアーを学習した生成ＡＩを使って、消費者がオリジナルの旅行プランを作れるサービス」を提供したりすることも考えられます。

これらの新規事業戦略により、既存事業は一定の人だけを対象としていたビジネスから、全てのユーザーが参加可能なビジネスへと変貌します。さらには、消費者の創造力を引き出し、サービス提供者と消費者の間に新たな交流の場を生み出すことで、既存事業に対しても新たな価値をもたらします。

このような新規事業戦略が可能となる背景には、生成ＡＩの「抽出」・「編集」・「表現」の３つの役割があります。これらを活用することで、一般の人々でもプロフェッショナルな成果を得られるようになるのです。

以上のように、生成ＡＩの登場は新規事業戦略を大きく変革する可能性を秘めています。その中心にあるのは、「究極のパーソナライズ化を目指す」経営戦略であり、これは既存のビジネスだけでなく、新規事業戦略にも大きな影響を及ぼすのです。

## **ＨＲ戦略の変化**

### **採用活動の変化　―生成ＡＩの活用に素養のある人を採用―**

採用活動というものは、その企業が発展していく上で最も重要なプロセスの一つです。これまでの採用活動というのは、「自社の事業で必要となる人材のスキルを定義し」、そのスキルを持った候補者を職務経歴書や、複数回の面接、適性検査などのアセスメントツールで判別していくという流れが一般的でした。

具体的な業務スキル以外にも、カルチャーや雰囲気などが合致するかも評価の一部となりましたが、結局のところは、ある程度既に求める人材にＦｉｔしている人を探してくるという活動が中心でした。

しかし、この新世代のＡＩ、特に生成ＡＩの台頭により、従来の採用のパラダイムは大きな変革を迎えるでしょう。その変革の中心にあるのが、既存事業や新規事業の変化と、新たに必要となる業務スキルの不透明性、さらには、生成ＡＩが従来の業務スキルを代替可能にするという現実です。

それでは、具体的にどのような影響があるのでしょうか。一つ目は、先ほど説明した通り、既存事業や新規事業がこれまでと大きく変わる可能性があり、求める人材のスキルが不透明になるということです。

つまり、これまでのようにはっきりとしたスキルを必要とする職種ではなく、未知の領域に対応可能なポテンシャルを持った人材が求められるようになるでしょう。

もう一つは、従来必要とされていた業務スキルが、生成ＡＩを使うことで可能になるということです。例えば、文章を書く能力、デザインのセンス、さらにはプログラミングの技術など、それらのスキルを生成ＡＩが手助けし、あるいは全く新しい形で代替することができます。

これらの変化を踏まえると、採用の対象が今のスキルを持っている人から、「今後の自社のビジネスに対して、そして生成ＡＩを使える素養がある」人に変化する可能性があります。つまり、仮に今までその業務をやったことがない人でも、生成ＡＩとの相性や新たな事業への適応力があれば採用される可能性が高まるのです。

具体的な採用活動としては、これまで通り面接などで感触を見極めるということは引き続き存在しますが、素養を見極めるテスト・アセスメント・ゲーム・ワーク等がもっともっと重要になるでしょう。例えば、実際に生成ＡＩを使って何かを作成するワークショップを行い、その結果を評価するという採用活動が行われるかもしれません。

また、エンジニアやデザイナーが自分の作品を採用活動で提示するように、候補者が生成ＡＩをどのように趣味で使っているか、という情報も重要な判断軸になるかもしれません。

例えば、候補者が生成ＡＩを使って独自の小説を書いたり、アートを作ったりしている場合、その創造性やＡＩとの協働能力が評価される可能性があります。

これらの考え方は、人事部門のみならず経営者層にとっても大変重要な視点となるでしょう。採用活動はその企業の未来を形成する重要な一歩であり、その基準が大きく変わるということは、企業全体の戦略にも影響を与えます。

つまり、生成ＡＩの普及は、求める人材像や採用手法を大きく変えることになるでしょう。そして、それは単なる技術の進化を超えて、人事戦略そのものを根本から変える可能性を持っています。

だからこそ、生成ＡＩの持つ可能性を理解し、その技術を活用する能力を持つ人材を採用することが企業にとって重要になるでしょう。そしてそのためには、採用基準や採用プロセスの再定義が必要となります。

### **育成の変化　―パーソナライズ化された育成プログラム―**

「育成」という言葉を聞くと、まず頭に浮かぶのは社内研修や、実務を通じて得られる経験、指導者からの一対一の指導です。長らくこれらの方法が主流でしたが、生成ＡＩの台頭により、育成の風景が劇的に変わるかもしれません。

それでは、具体的にどのような変化が起きるのか見ていきましょう。まず、これまでの育成手法の問題点を振り返ります。

1. 研修等はどの人にとっても画一的な内容であった

これまでの育成手法の中でも特に重要な役割を果たしてきた研修ですが、一律の内容が提供されるため、参加者の中には既に習得している内容であったり、逆に理解するには難しすぎる内容であったりする、という問題がありました。

個々の従業員のスキルレベルやニーズに応じてカスタマイズされた研修は、大規模な企業ではほとんど不可能でした。

1. ＯＪＴは１人が教育できる数に限界がある

ＯＪＴは業務を通じた実践的な学びで、特に新入社員の教育では欠かせない手法です。しかし、マネージャーや先輩が手取り足取り指導するため、その規模は必然的に制限されます。教える側のリソースと時間の制約から、全員に同等の機会を提供することは難しく、その結果、育成の機会は限られた数の人に限定されてしまうことが多いのです。

1. ＯＪＴは教育する人によって品質が変わる

ＯＪＴのもう一つの問題は、その品質が教える人によって大きく変わるということです。同じ業務でも、その指導方法や視点は教える人によって異なります。結果、同じポジションの人でも、育成の質と結果が大きく異なる可能性があります。

このような課題を背景に、生成ＡＩが新たな可能性を提供します。ＡＩを活用すれば、従業員個々のニーズに対応したパーソナライズされた研修や育成プログラムを提供することが可能になります。これによりまず、研修の内容が画一的であるという問題（①）を解決できます。

さらに、生成ＡＩを活用すれば、ＯＪＴの規模を拡大し、教育の品質を一定に保つことも可能になります。ＡＩは時間や場所に制約されず、無限の教育リソースを提供できます。これにより、教育を受ける人の数に制限がある（②）という問題を克服することができます。また、ＡＩは一貫した教育を提供するため、教育の品質が教育者によって変わる（③）という問題も解決できます。

このように、生成ＡＩは人材育成の手法を革新し、企業の競争力を強化する可能性を秘めています。生成ＡＩが可能にする個々のニーズに応じた研修や、無限の教育リソース、一貫した教育品質は、従業員一人ひとりのポテンシャルを最大限に引き出し、組織全体のパフォーマンスを向上させるための助けとなります。

これからの企業では、人材育成が一段と重要になることは明らかです。新たなビジネスモデルやテクノロジーが次々と生まれ、それらに対応するためには、従業員のスキルの継続的なアップデートが求められます。従来の育成手法では、これらの変化に対応するのは困難でした。しかし、生成ＡＩの導入により、それが可能になるでしょう。

### **人材配置の変化　―顧客接点と商品の橋渡しになる生成ＡＩ―**

企業の人材配置は、その業種や職種、さらにはビジネスモデルの特性によって大きく変わる部分ですが、生成ＡＩの台頭により全体的なトレンドが見えてきています。

従来、企業の人材配置はざっくりと分けると、顧客接点側（営業職や販売職やマーケティング職など）と商品開発側（製品開発、商品開発、エンジニアなど）に分かれていました。バックオフィス部門など他の部門についてはここでは省きますが、この二つの側面に人材を配置することが主流でした。

しかし、これまでに述べてきた通り、生成ＡＩの導入と発展は、これらの配置を大きく変える可能性があります。

それでは、どのように生成ＡＩが企業の人材配置を変えるのでしょうか。私の見解では、以下の４つの役割に分けられると考えています。

1. 顧客ニーズの抽出者

これは最も顧客に近い立場で、顧客の顕在的なニーズや潜在的なニーズを抽出する人です。これは生成ＡＩがどんなに進化しても変わらない重要な役割です。従来の営業職や販売職の中で、顧客とのコミュニケーションを重視していた人々がこの役割を担うでしょう。

1. 顧客へのインターフェースの設計者

これは、顧客が生成ＡＩをどのように利用するか、どのようなＵＩが最適なのかを設計する役割です。また、どのようにすれば必要なデータを取得できるかもこの役割の責務です。従来の営業職で特に企画を得意としていた人々や、企画・クリエイティブ系の人々がこの役割を担う可能性があります。

1. 生成ＡＩの活用方法の企画者

これは、生成ＡＩの潜在的な能力を活かすための新しい活用方法を企画する役割です。顧客のニーズに基づいて、生成ＡＩをどのように活用するかを考えます。従来のプロダクトマネージャーや事業開発者がここに該当するでしょう。ただし、この役割では、生成ＡＩについての深い理解と、具体的な仕組みについての知識が求められます。

1. 生成ＡＩの中身の設計者

これは、生成ＡＩのプロンプトやデータ構造を設計する役割です。エンジニアやデータサイエンティストがこの役割を担うと思われます。

これらの役割は、従来の「顧客と商品」の二分法から、「顧客・生成ＡＩ・商品」の三分法へと思考の枠組みを拡大することを示唆しています。

生成ＡＩを活用し、顧客価値を最大化する企業は、この三分法を理解し、それに基づいた人材配置を実現する必要があるでしょう。それが今後、成長し続ける企業の姿かもしれません。

この三分法に基づく人材配置の特徴的な点は、それぞれの役割が相互に密接に関連していることです。たとえば、①顧客ニーズの抽出者が得た情報は、②顧客へのインターフェースの設計者が顧客体験を最適化するために用いられ、それは同時に③生成ＡＩの活用方法の企画者が新たな活用方法を考案するための飛躍的なインプットとなります。

さらに、それらの情報は④生成ＡＩの中身の設計者がＡＩの機能を改善・拡大するための重要なフィードバックになります。

そして、この人材配置の変化は、企業の組織構造そのものにも影響を及ぼすでしょう。各役割が密接に連携することで、情報の流通が速まり、組織全体としての意思決定も迅速かつ効率的に行えるようになります。

例えば、顧客のニーズがリアルタイムで製品開発に反映され、顧客の体験が瞬時に改善される、という流れが現実的になるでしょう。

それだけでなく、各役割が持つスキルセットも変わる可能性があります。たとえば、顧客へのインターフェースの設計者は、従来のマーケティングや営業のスキルに加えて、ユーザーインターフェースやユーザーエクスペリエンスの設計スキルを持つ必要が出てきます。

また、生成ＡＩの活用方法の企画者は、ビジネスの視点だけでなく、技術の視点からも商品を評価し、新たなビジネスチャンスを発見する能力が求められるでしょう。

このように、生成ＡＩの進化は、企業の人材配置を大きく変え、新たな組織構造やスキルセットを必要とします。それは挑戦でもありますが、同時に大きな機会でもあります。生成ＡＩをうまく活用し、それに適応した新たな人材配置を形成することで、企業は顧客価値を最大化し、競争優位性を獲得することが可能となるでしょう。この新たな時代において、成功する企業は、常に変化を恐れず、新たな可能性を追求することでしょう。

**本章のまとめ**

* 生成ＡＩは業界問わず企業戦略に大きな影響を与える
  + 究極のパーソナライズ化を目指す経営に変わる」
  + 既存事業は、今ない情報をデータ化して、顧客体験を向上させる
  + 新規事業は、自社のビジネスを、全てのユーザーが参加可能なビジネスに変容させる
* 企業戦略の変化に伴い、ＨＲ戦略も大きな変化が起こる
  + 生成ＡＩの活用に素養のある人を採用する
  + パーソナライズ化された育成プログラムにより個々が能力を高める
  + 生成ＡＩが顧客接点と商品開発の間に入るような人材配置になる

# **最終章　生成ＡＩの未来と考えるべきこと**

## **本章で説明すること**

本書ではこれまで、生成ＡＩがもたらす潜在的な変化を、「価値観」、「仕事」、「人材」、「企業」という視点から探求してきました。それぞれの視点から見えてきたのは一見独立した変化のように思えますが、実際には深く結びつき、相互に影響し合っています。

これら全てを鑑みた上で、我々がこの最終章で取り組むテーマは、「生成ＡＩの未来と、私たちが日常的に考えるべきこと」です。生成ＡＩの発展が今後どのように進行し、その結果私たちの生活はどのように変わっていくのか。

そして、その変化に対して、私たち一人一人がどのように向き合い、どのような知識や思考を身につけるべきなのか。これらを語ることで、この一冊を締めくくりたいと思います。

まずは、生成ＡＩがこれからどのように進化し、私たちの世界をどう変えていくのか、その大まかな予想から始めます。そして、その未来に向けて、私たちが今から学び、意識すべきことを探求していきます。

皆さんと共に、その先の未知なる世界を見つめていきたいと思います。最後の章、どうぞお付き合いください。

## **生成ＡＩの今後の流れ**

### **法整備　―私たちの価値観や目的に基づいて形成される―**

私たちがＡＩの力を十分に活用し、その恩恵を受けられる未来を想像する一方で、ＡＩの存在が持つ課題やリスクについても目を向ける必要があります。

特に生成ＡＩは、その複雑な能力と多様な応用のため、多くの法的・倫理的な問題を引き起こす可能性があります。本章では、生成ＡＩの未来の展望の一部として、その法的側面について考察します。

生成ＡＩに関連する法整備は、その進歩と拡大に対応するために必要不可欠です。例えば、生成ＡＩによって新たに生み出されたコンテンツの著作権は誰に帰属するのかという問題があります。この点については、様々な議論が交わされていますが、現時点では明確な答えは出ていません。

また、生成ＡＩの進化は新たな不正行為を生む可能性もあります。例えば、学生がオンラインテストで生成ＡＩを用いて解答を得るという事例はすでに報告されています。これらは、生成ＡＩの能力を適切に制限し、管理するための法的枠組みの必要性を強く示しています。

しかし、法整備が困難な理由の一つは、生成ＡＩの能力と応用範囲が急速に拡大していることです。この動きに対応するためのルール作りは、複雑で時間を要するものです。

そのため、最も重要なのは、私たちがどのように生成ＡＩを使い、どのようにその潜在能力を引き出すかについて深く考え、理解することです。人間がどうあるべきかという価値観が反映され、それによって法整備が進められるべきです。

その一例として、子供にＣｈａｔＧＰＴの使い方を教える際に、ただ質問を投げかけるだけではなく、質問の回数を制限するというアプローチがあります。

この方法では、子供は生成ＡＩに頼るだけでなく、自分自身で考え、問題を解決する能力を養います。これは、生成ＡＩを使うことで人間の思考力を向上させる良い事例です。

このように、生成ＡＩの利用方法やルールは、私たちの価値観や目的に基づいて形成され、それが法律や規制に反映されるべきです。生成ＡＩの未来を考える際には、その技術的な進歩だけでなく、私たちがどのようにそれを活用し、それによってどのような社会を作り上げるかという視点も重要です。

### **活用難易度　―誰もがもっと簡単に生成ＡＩにアクセスできる―**

私たちは、生成ＡＩの未来について考える際、その進化の速度やその応用範囲を主に注目しますが、同時にＡＩを使いこなすための「難易度」も重要な側面です。ここでは、その難易度と今後の展望について解説します。

２０２３年８月現在、生成ＡＩを１回でも使用した経験がある人は多いかもしれません。しかし、その全てが生成ＡＩを実用的に使いこなしているわけではないでしょう。

ＡＩを効果的に活用するには、コンピューターやスマートフォンを使いこなすだけでなく、特定のＡＩツールの使い方を理解し、それを活用するスキルが必要です。

例えば、最も一般的な生成ＡＩとも言えるＣｈａｔＧＰＴを使うには、適切なプロンプト（指示文）を書くことが必要です。そして、どの領域でどのように活用すれば良いかを理解することも重要です。

さらに、アウトプットが複雑になればなるほど、例えば画像生成ＡＩや動画生成ＡＩなど、それらの仕組みや使い方を理解するのは一般の人にとってはなおさら難易度が高くなります。これらは私自身もまだ完全に理解していない領域もあります。

しかし、私はこの「一部の人しか享受できない」状況は間もなく変わると確信しています。すなわち、生成ＡＩはやがて誰もが容易にアクセスできるようになるでしょう。

具体的な方法としては、ＧｏｏｇｌｅやＭｉｃｒｏｓｏｆｔのように既存のウェブ検索機能に組み込むことが考えられます。もしくは、ｉＰｈｏｎｅなどの基本的な機能として組み込むことも可能でしょう。あるいは、新たに生成ＡＩ専用のデバイスが登場することも考えられます。

その方法については、これから様々な試行錯誤が行われることでしょう。しかし、いずれにせよ、「誰もがもっと簡単に生成ＡＩにアクセスできる」世界が間もなく訪れることは間違いないでしょう。

その世界では、ＡＩはもはや特別なスキルを持つ一部の人々だけのものではなく、全ての人々の日常生活に深く組み込まれる存在となるでしょう。

### **アイデンティティ　―私は何を目指しているのかが自己表現の核―**

生成ＡＩがより一般的になり、誰もが簡単にアクセスできる世界が訪れると、それは我々の自己表現とアイデンティティの形成にも影響を及ぼすでしょう。

これまで、自己表現の基本は「自分が何を持ち、何を達成したか」でした。例えば、面接や初対面の人への自己紹介では、「私は特定のスキルを持っています」、「私はこれとこれを達成しました」、「私の得意分野はこれです」という形式で語ることが一般的です。

これは過去から現在にかけて自身が何を達成し、どんな能力を持つか、という「Ｃａｎ」を表現する方式です。

しかし、生成ＡＩの発展と普及に伴い、特定のスキルを持つことや、特定の成果を達成することが人間の能力だけに依存する時代は終わりつつあります。生成ＡＩが人間の能力を超越し、さまざまな分野で高度なアウトプットを提供するようになると、自己を表現する方法も変化を余儀なくされるでしょう。

ここで重要になってくるのは、「Ｗｉｌｌ」、つまり何をやりたいのか、という「インテンション」を表現することです。「私は特定のスキルを持っています」から、「私は特定のことをやりたいと思っています」というアプローチへとシフトするのです。

その意思やビジョンこそが、生成ＡＩと人間が協働する未来での新たな自己表現の形となるでしょう。

そして、この変化は、生成ＡＩを活用する新たなアプローチを生み出す可能性を秘めています。同じ意志やビジョンを共有する人々が集まり、生成ＡＩを活用して新たな価値を創造する、そのような動きが広がるでしょう。

さらに、こうした意志やビジョンは個々の人々の個性となり、新たなアイデンティティを形成します。「私は何を達成したか」ではなく、「私は何を望んでいるか」、つまり「私は何を目指しているのか」が、新しい自己表現とアイデンティティの核となるのです。

このような「生成ＡＩとアイデンティティ」についての議論は、これまでの自己表現やアイデンティティのあり方を再考する契機となります。そして、それは新たな未来を見据え、我々の生活や働き方に新たな価値を生み出すことでしょう。

## **今日から学ぶべきこと**

### **生成ＡＩをどう学ぶか　―プロンプトより原理や性質を見よ―**

最後に、私たちが今日から学ぶべきこと・学べることを説明して、本書を締めたいと思います。

まず一つ目は「生成ＡＩをどう学ぶか」についてです。この最終章で、それに焦点を当て、どのように日常生活の中で生成ＡＩを学び、理解し、活用していけるかを考えてみましょう。

先ほど述べた通り、現在生成ＡＩは一部の人々によって活用されるツールとして存在していますが、その未来は「誰もがもっと簡単に生成ＡＩにアクセスできる」世界となるでしょう。

その一例として、「プロンプト」というトレンドがあります。「生成ＡＩ　プロンプト」で検索すれば、様々なトピックや活用方法が見つかります。これはＡＩへの指示や質問を投げかけ、それに対するレスポンスを得る手段であり、今日ではこれを効果的に使いこなすテクニックが重要となっています。

しかし、これらのテクニックは時間と共に変化し、ＡＩの進化により次第にシンプル化されるでしょう。例えば、プログラミング言語もかつては機械寄りの言語（Ｃ言語など）をマスターすることが必須でしたが、現在ではより直感的な言語や、プログラミング知識を必要としないノーコードツールが登場しています。

しかし、これは「生成ＡＩを学ばなくて良い」ということを意味するわけではありません。ここで強調したいのは、特定のプロンプトのテクニックを学ぶことよりも、「生成ＡＩがどのように動作しているのか」、「生成ＡＩがどのようなアウトプットを得意としているか」という原理や性質を理解することが重要だという点です。

具体的には、自分で生成ＡＩを使ってみて、その反応やアウトプットを見ながら、「これは役立つ」「これは役立たない」、「これには向いている」「これには向いていない」という体験から学んでいくことが大切です。

それにより、生成ＡＩが得意とする分野や、その限界を理解し、より効果的に活用する方法を見つけることができるでしょう。

この学び方は、生成ＡＩの未来的な進化に対応するための一つの戦略であり、また、私たち一人一人が生成ＡＩと協働する能力を磨くための手段とも言えます。

### **日常的に何を意識するか　―何が変わるかの仮説を無限に持つ―**

もう一つ重要な視点は「日常的に何を意識するか」です。生成ＡＩの進化は、私たちがどのように日常生活を送るか、仕事を行うか、趣味に没頭するか、さらには飲食店での体験にすら影響を及ぼす可能性があります。

ここで意識すべきなのは、具体的に「生成ＡＩによって何がどう変わるのか」という仮説を持つことです。

例えば、あなたがビジネスパーソンであれば、自身の会社や業務が生成ＡＩによってどう変わる可能性があるかを考えてみてください。生成ＡＩが取引先との交渉や市場分析、さらには製品開発までを手助けする日が来るかもしれません。

また、日常生活の中でも、例えば、スーパーマーケットで買い物をする際、生成ＡＩが最適な食材を提案し、その日の気候や栄養バランスに基づいたレシピを提示するかもしれません。

趣味の領域でも同じです。たとえば音楽が趣味のあなたが、曲作りのアイデアを求めて生成ＡＩに相談し、それが一緒に新しい旋律や歌詞を創造してくれるかもしれません。

さらには、飲食店での体験も変わるかもしれません。生成ＡＩがお店の口コミや評判を分析し、あなたの好みに合ったレストランを提案する日が近い未来に訪れるかもしれません。

こうした生成ＡＩによる変化の仮説を持つことは、ただひたすら、生成ＡＩのニュースを勉強するよりも、私たちはこれが最も重要な学習だと考えます。

そうすることで、生成ＡＩに関するアンテナも高くなり、自分が生成ＡＩで何を実現したいのかが見えてくるはずです。

私がこの本で伝えたいことは、みなさん一人一人が自分自身の頭の中で生成ＡＩについて考え、それを日常生活や仕事、趣味にどのように応用できるかを考えることです。

この本を閉じた後からすぐに、「生成ＡＩで〇〇がこう変わる」という仮説を持ち、それを探求する習慣をつけてみてください。私たちは、それが最も価値ある学びとなるでしょう。

**本章のまとめ**

* 生成ＡＩの今後の流れ
  + 私たちの価値観や目的に基づいて、法整備がされていく
  + 誰もがもっと簡単に生成ＡＩにアクセスできるようになる
  + 「私は何を目指しているのか」が、自己表現の核となる
* 今日から学ぶべきこと
  + プロンプトを学ぶよりも、生成ＡＩによってできること・向いていることなどの原理や性質を経験によって学ぶことが重要
  + 日常的に、「生成ＡＩによって何が変わるか？」の仮説を無限に持つことが重要

**さいごに**

この本の最後に、まずは一言、お礼を述べたいと思います。ここまで読んでいただいた皆様、誠にありがとうございました。この本を手に取ってくださった皆様の時間と思考に対して、私から深い敬意と感謝を表します。

私はエンジニアではありません。しかし、生成ＡＩが登場した時、その力が人類の生活を根本的に変えるだろうという直感に駆られました。

しかし、一方で、生成ＡＩの具体的な使い方やプロンプトの学習に励んでいく中で、何度も迷走しました。何が本当に重要なのか、どうしたら生成ＡＩの真価を引き出せるのか。その答えを探す過程が、この本の書き始めであり、自分自身の学びの旅でもありました。

私が書いたことが、読者の皆様の日常の考え方や行動に影響を与え、そして何よりも、生成ＡＩの可能性を共有できたなら、これ以上の喜びはありません。

そして、皆さんが自身の経験や視点から生成ＡＩについて考察した書籍やブログを書くなら、私もぜひその読者になりたいと思います。それが新たな知識の源となり、私たちが共に学び、共に成長するきっかけとなるでしょう。

この本を書くことは、私にとって大きな挑戦であり、同時に大きな喜びでもありました。そして、その最後に皆さんがいてくださることが、私にとって何よりの報酬です。

本当に、ありがとうございました。